三養雜記 廿号

三

1 5
1491
2

門 45
號 1491
卷 2

昭和四十五年
35.1.25
愛知県立図書館
藏書

三養雜記卷三目録

東北帝国大学図書

博檢校小傳　孤矢
龜のさゝ櫛
我子を忤と云
龍髮
常元蟲
水虎
萬葉集夫木鈔
餘一
岐神
仁和寺書目
鍾馗と蝙蝠圖
角兵衛獅子
人角
平家蟹島村蟹武文蟹
煖酒
阿伽の水
和歌よて狐狸を伏
手遊

兩部唯一の神道
鳥居
長坐する時の心得
虎の畫法
藤豆　鈴蟲松蟲
門ぶく
大田道灌の和歌
めでたうたうたう
俳諧百韻はじめ
木牛
楠家菊水はた紋
東吳といふ銘の手水鉢
樊噲門破の辨
畫家の用意
硯はた面に文字をうぬる
開帳
淺草寺はた繪馬
茶おけ
ゑてやや次
三國一の醴

三養雜記卷三

塙撿校小傳

塙撿校名八保己一武藏秩父郡保己村の產なり、たゞの萩原宗固はた門に入て詠歌和學ふ心をひそめ、皇朝の古書を集めて學校を興さんとの志ありて、遂に和學講談所を建て學生を教授す、藏中はた書二萬餘卷ふ及び、名山古刹に藏するところ異書を搜もとめ、流布の書とゝども異本あれバこれを收拔刊一名て羣書類從といふその書六百六十餘卷その功三十九年をつゝて集成すとゝ、後生その賜を受ること少なからず、猶且續集千餘卷はた寄書あつまりたる人

目録ハ已ホ印行して世ニ布ヲ吾邦古来より大部の書あり
といへどもその右ニいづるものあるとれ〳〵予うゝおりふ三國
志魏の應劭傳ニ五經羣書以類相從といふとあるによりて
名づけられしもあるべしハその著すところの書、
掛庭譜畧　皇親譜畧　螢蠅抄　花咲松
校刻するものハ日本後紀令義解百練抄類聚符宣抄徒然草等數部あり常ニ詠ずるところハ和歌をあつめ名づ
けて總隠集といふあ人その書名をこゝろとあり〳〵ハ撿校と
らひ〳〵云深き意あるホあるべし總撿校の隠居ハ集といふと
ありといへれたりとぞ又ある時ニ方ゝ水無月のころ暑

みて源氏物語を講説せられるに、ひとゝきの涼風吹
きこゝろやいなやゝ〳〵ホ侍しに人の先生あゝ〳〵待たまへといひなれ
バ撿校ハ火の消たるもあるべきれバ何故ゝ〳〵ハ火
の消てハ〳〵ハ火とりに〳〵まで待せたまへと答るに、撿校のうちあゝ
で目のあるゝハ不自由あるものゝれと戯それるよりふる滑
稽もまあ〳〵とや一號を水母子といひ、ハ水母鰕の目を
借よるホ諺より出り、水母以鰕為目といふとハ越絶書廣韻
ならび楞嚴經ニあり、あるハ抹下偶談農田餘話ホも説ゝ
ゝ、まゝ五月五日ハ撿校の誕生日あれバ或人云五月五日ニ生る
子ハ親ニたゝるといふ〳〵昔より伝れど撿校の家を興〳〵

子孫のさえ〳〵ふく〳〵、古来の俗説をゆゑふ足りとふて、因ま
云五月五日ハ生子を忌と史記ハ孟嘗君以五月五日生云、五
月子者長與戸齊將不利其父母とあり、索隱ハ風俗通
云俗説五月五日生子男害父女害母也とふて、大鏡
裏書ハもとゑ、塩嚢鈔もをなじたれバ吾邦ふくもかきか
らうとゑんぐう、文政四年九月十二日ハ卒行年七十六歳か
ゑ、検校のとより史學ハ精細世その比をゑず、予ゑ考〳〵き
る話ハ、浅艸ハ山岡明阿の門人ゑく斤山足水とふふ人あり、
今山岡明阿の手澤ハ遺書をその家ハつゑう足水ゑうく
宸翰の御願文一葉を藏せり太上天皇とのゑありて、御華

押だハ有れバ、ゆゑ定ゑて弁ゑうあ〳〵ゑ御書も
ゑ〳〵〳〵くまゝ、ゆせバ後ハ墨本として人ゑも贈れバ予も一
本を藏せり、誰も〳〵考ゑ、てあ〳〵を或時輪池翁の席上
ゑてのとれりしゑ、の宸翰ハをいひ出たるハ塙検校もその坐
ゑありていたれゑ、ゑいうゑる御文體ハとゑ、ゑゑ幸ハ翁の
坐右ハ宸翰の摹本あ〳〵をとりいで、ゑゑめよう讀りそやく
ゑゑ半ゑりハ、廷禁之闕宸居無動姑射之山萬壽不
驀とゑる文ハ〳〵りて、検校ゑゑと手を打ゑ笑ゑてゑうた
り〳〵ゑゑにより、坐中の人いゑとふふ、されバゑよこハ華園
帝の宸翰ありそのよ〳〵ハ華園院の仙洞ゑそおゑ〳〵まゑ〳〵時

伏見院猶いまゞ仙洞なてゝまゝハ、伏見院を姑射と稱し、當
今を廷禁之闕とハゝゝたまゝたるれりとゝもあげよ辭
じられうとゝや、數年人ゝの考へ得ざりしをゝくゝゝとゝよりき
まゝたるゝど、此ひとゝふくも強記博聞ぬひやうゞと輪
池翁のゝゝ刪りき、

仁和寺書目

ふるき書目ハ仁和寺書籍目録とふものあり、これを仁和寺
の藏書目録と思ふ人ゝあれどゝさにあらず、永享中將軍家の命を
うけて、外史中原氏の奉し本朝の書目あり、その書目の仁和寺
宮ハ文庫ハ在し本をもて世ハ寫しつゝたるあり、されハ本書

奥書ハ、以仁和寺宮本書之普光院被尋之時注文とあり、

龜のゝ擂

新撰六帖ハ光俊の龜の歌り

河の瀬ふるきたる龜のゝ擂そ見し世ゝの者し見る
とゝ見えゝうこの龜ハゝ擂を今の鼈甲ハ擂のとゝゝ人
もあるゝ多れどゝさにハあらゝこれハ搜神記ハ見える漢靈帝
の時江夏黄氏の母ハ盤中の水ハ浴して龜と化て深淵ハ
入りてその後をり水の面ハゝるゝ銀釵ハかれその首ハわし
とつゝをりとゝ釵を擂ハ見れしてよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て鼈甲の擂ハ證とするハ誤ありとゝゝゝゝゝあゝゝ黄氏の

母の故事よあるべきれば歌の意きこえべ

孤矢

新撰六帖の知家の矢は歌よ

人こころ頼べきき孤矢はたゞそのまゝまこそ地とせぬ

この孤矢とのるハそもそも矢のとり源平盛衰記ふ武者をバ

え射ずされバ孤矢よこそあれといぞんも本意あれバ只射よ

といふものの多くとあるよりて世りつよ吾邦の俗よ意外ふ出て

測べくべる事を孤とも天狗とる神とも云ふ唐山よて鬼

をどいふ多くく陸奥國よて山市を孤舘越中よて孤森と

云ハ海市を經説よ乾達婆城といふよくあり雷斧石の

漢名霹靂礎和名きつねのまさつ又てんぐのまさつ山慈姑の

異名鬼燈檠和名きつねしりくさをあつヒありべ猶

ふて天狗の礫天狗倒俗よも天狗俳諧天狗頼子などの名目も

ふ同意よて行方の知ぬる天狗よさられしとも神ぞとる

ゝ易よ陰陽不測之謂神孟子よ聖而不可知之謂神と

ことひ鬼とふも鬼神の謂ありまた史よ天狗星あり人意よ

測べくべるの義ありゝ

鍾馗よ蝙蝠を畫ける圖

鍾馗ハ世と玄宗の夢ところその事唐逸史よ見えたり今和

漢ともその圖をつくく辟邪の神とす世よ鍾馗の像れ

ちくふ蝙蝠を多くかくのまくあり何かるとけまて多くこゝふ
とを蕗ゝりれかきまあくゞ予ろくゝ切りふま鍾馗ハ辟邪の神蝙
蝠を多くハ迎福の意よて辟邪迎福の圖ゐん蝙蝠の蝠を音
通あくゝ福字まうくて蝙蝠ま疏を畫きて福禄の圖とすゝ如
き、ゝか慶祝の意を寓すゝとゝ切りひゐくゝま新渡の大銭
ま銭面ま驅邪降福の字ありてその背ま鍾馗ま蝙蝠の圖あ
ま、予ゞ意ま暗合せくハよりてその頃馬山翁ま乞くゝ呉小僊ゞ
圖を縮寫ゝ概畧を併考ゝくゝ新禧ゝ贈りのとせゝとあり、

我子を稱ゝて悴といふ

ゼゞれとゐふ詞ハ瘦枯ゝ畧語まてかと人を卑めのゝゝ詞

ありゝその證ハ室町殿日記ま主君ま我れまゐくゝせてすで
ゝ湯命を失ひ乞食同前のゼゞれゞもとゝいまゝ武邊咄まゝ、
丹後守大の眼をくゝのゞゝて推參ゐくゝゼゞれめと詞てゆと
ゐるゐゞまくゝ今ハ貴賤ゐる我子を稱すゝ詞とゐれくゝハ
謙辭ゐりゝ倭爾雅ま悴俗作悴今倭俗稱我子曰悴蓋謂
悴者之意猶中華稱我女謂蕉萃とゐりゝやつゞれとゐふ
も後ゝ類聚鈔ま奴僕和名夜豆加礼とありゝ日本書紀通
證ま吾憔悴枯槁之義謙辭也とゐりゝくれバこれもとハ
奴僕の稱ゐりゝ今自稱ゝて僕とゐつゞれとゐふ同じゝ、
ゼゞれとゐふま我子を

角兵衛獅子

越後國よりいづる獅子舞あり、世に越後獅子とのひまさ角兵衛獅子ともいふ、角兵衛の名その故をあらざるよ、或云武藏國氷川神社に古獅子頭あり、それあるうの村々獅子舞をすゝめ、その獅子頭をうつて舞より、蓋田樂の遺風なるやそ の獅子頭の角に菊の御紋あり、御免天下一角兵衛作之と彫てあり、これ角兵衛は古代れ獅子頭の名とゝなえうゝ、さて今の角兵衛獅子の詞に、おちやらさもち小桶でもてこひすつてん てれつく庄助さんあんだんくらつても辛もねへあらうゝ、何のまけそをこゝぬ、定めてふるき詞をつゝんたるあるべしこの銘に

天下一とゝふ號は天の下にあるべきよしの意なるべし、昔は器物にも食物にも屁ふせしとふく信長記に天下一とゝの藝者をそろへとゝふ、その後いくばくもなく天下一の號を禁じたまふ、今はその號を改めたまふ、はじめは鏡の銘にのこれるとゝ見えたり

龍鬚

疊を龍鬚とゝふは龍鬚の誤なりそは席を造る艸を龍鬚艸といふ、その艸は生茂たるゝ龍の鬚に似たるより屁せて名あり晉東宮舊事に太子有獨坐龍鬚之席一國清百錄に龍

鬚席一領、唐書地理志小鳳翔府土貢揉寶龍鬚席などいとゞ〳〵ゑえられバその誤ハ〳〵辨ずるも及ざれど吾邦ハ
そのあやまり来たるも亦ゆゑ〳〵雅亮裏束抄ハまうびんを
二枚ゐきて寛治二年記ハ龍鬚莚青地錦縁よりゆとあり
さゆゑ已ハ遊仙窟ハ龍鬚席ハ作まり注ハ燈心とあれバ
蘭草ゐるとゐるゑ〳〵因云鬚と鬢ハ字形もよく似れバあや
まりやすきを吾邦のこゝハ因話録ハ下輩不通義
理者使之馮文字甚誤云〻或多誤著熒熒合著大髭鬚合著
須多著賓鬢髮合著賓といゝうゐられバいゞくふるも點畫の似たる文
字ハ誤るとゐ〳〵と見えゝう

人角

文化庚午の藥品會ハ人角いでゝ、そハ薩摩ゐる伊作地
士黒川某ゝ額ハ一角を生じたり年八十七歳元禄三年庚
午夏五月十四日終と記るゝあり〳〵と人ゐめづ〳〵きこと
まゝあり〳〵葉ずるハ人角ハ和漢ゐる往〻所見あり、そのため
しるきハ〳〵日本紀畧寛平九年七月廿三日陸奥國
言安積郡所產小兒額生一角まゝ新著聞集ハ額ハ
角二本あり〳〵子を產たるゝあり又北窓瑣談ハ寛政四
年辛亥備後國蘆田郡常村の農夫八十餘歳ゐく額ハ
一角を生じ翌年正月十七日解脫と見えゝ譬曝雜記ハ梁

武帝時鍾離人顧思遠年一百十二歳蕭俱見其頭
有肉角長寸許傳俱余亦曽見二人一江蘭皐陽湖
人一徐姓嘉興人頭上皆有肉角高寸許年亦皆九
十餘蓋壽相也然二人皆貧苦無子則亦非吉徴と
いふべくれば人角ハ小兒と老人とふるくなりて再按ず
日本書紀垂仁紀ニ額有角人乗一船泊于越國笥飯
浦ゆゑあるふ〻〻角ともさゞめうねて古人の説もあればその
實ハいふぞや、

常元蟲

近江國志賀郡別保とのふ里ハ西念寺とて淨院あり、寺
境の乾四至四町ばかり此人家の堰ありて住人あ〻たま〻
こゝに居るものハ必その身ニ禍あり〻とや、俗ニ常元
やきとのふ蒲生家の侍南蛇井源太左衛門とのふとの天正
の兵亂ニ無頼と成り強盗して諸州ニ横行せり、その徒數
百人ありて害をなす、年老て別保ニ入り有て悪行を恣
ふせ〻ば人の勸ふよりて薙髪〻〻常元と称す、慶長五年
諸國の姦賊を尋召捕られしころ、幾年ら悪行せ〻罪人か
ゝ〻ばとてその宅ハ柿木ニ縛せむ、諸人のゝ〻ら〻〻ゝ終
ゝ斬れたり、死ニのぞみてさゞ〻〻悪言を吐き更ニ人の憎を
うけ〻〻集首せられ骸ハ村の庄屋藤吉ニ下されり、柿の木ハも

とは埋こゝ〜ゞ、數日の後墳上よあやしき蟲多く生ぜり、形ハ
人を縛したるごとく、後蝶ま化て去るゝ、その殼木のこれ
を毎年あり、人これを常元蟲とゝふ、江戸よもきこえ享保癸
卯の夏ゝ元蟲を江戸の人こゝもゝ見るめづらかるものよ、
面目口鼻備り口のあたりも黄色あり手ハらゝ〜ゝまゝ〜縛せられしゞ如し、
足ハ縮たるごとく段ゝふ衣續あり、
蝶ま化するときハ黒絲と吐首より
下手足を繫縛し柿樹ま粘しゝ
中まゝらるものま似ゝ、背ま脱
穴あゝと鹽尻ま見えゝ、

この蟲を物産家ま見せるに、爾雅ま出たる蜢女とゝふ蟲ま、
邦俗ハおきく蟲とゝふものゝよ、物のまの常元が墳上の樹ま
たまゝ〜さる蟲ゝ生じたるゝ寓然あれど、自罪業ゝ報ふよ
ま見て彼ゞ名を蟲ゝまぞ員せて、常元ゞ悪事いひつゝて話柄
とするも因果のことゝおそるべし、

平家蟹　島村蟹　武文蟹

讃岐國八島の海濱ま鬼面蟹を産、鬼面蟹のことハ、介品ま祝ま世ふ
これを平家蟹とゝふ、壽永の戦争ま溺死の者の冤魂の化
すゝとゝふとハ世ふあまねく知ところ、さてこの蟹を地まよ
まてハ島村蟹とも武文蟹とも、文禄清談ま、近年世ま珍

くあやしきことゝおぼえあり、攝州尼崎の近所の川水ハ不
思議の鱉住めりとゝふ甲の面ハ人ハ顔昭ことあらられて彫
入たるゝ如く、その由緒を尋ぬるに、中ごろ細川武藏入道高國
法名天王寺の近隣まゝ生害せられしよ、その家人島村彈
道永正左衛門貴範とゝふ者、高國ハもとり後れ追つきて御
行へを足奉らんと急ぎ追ふ、この貴範を待ずして道永敵ハ
襲ものせんかゝ一壺を敵ハあやしめられ遂ハ足出されて
討れ侍るとあんこの生害を貴範聞て無念ハ切ひおくれ
敵を縱横無慙ハ追ちゝひ向ふ敵二人ひつゝきて引ハセ川
瀬の深ハとび入て、敵味方三人水底ハ沉りそのの靈化して
鱉とあると、云云天王寺より尼崎へ行く道ハ野里川とゝふあり
すかたちその川へ入とゝて、島村ゞ靈あれバ俗ハ島村鱉とゝ
とあり、この事まゝ攝陽羣談、書言字考ふもとゝ、諸國里
人談ハ、攝津國尼崎兵庫の浦に鱉ハ甲ハ有る面のごとゝふ
しゝ甲を著たるありさまなれ、これ秦武文松浦五郎ゞなゝ
海中ハ入て死するその靈ありとゝふ、まゝ東里新談、介品
まゝこのことあり、すゞゝ品物の形狀あるひハ產所ハ有て、
傳會の說あると和漢それたゝいと多し、

水虎

水虎、俗ハ河太郎、おゝうつぺとゝふ江戸ハ川水ハ浴する

童をどの時そこのうのうをひろうとあるあどうふをきゝ
どいと稀まれ、そのうのをたうまるものかあ、西
國の所よりてハ水邊をどまて常まるとありとぞ怪を変
る狐狸とハおのづからとれり、ぞくきうひとつふうりをいそぐ島の
茄子ま一つどま齒ぐさ三四枚づつのこりたるとありと、
その畠ぬゝよりきうり、仇をあすと執念とさうまあるて、
筑紫ぐさまての仇をそれ人江戸まきうりて猶怪のあるとて
あどるきうり、うのうのの馬真こそ背腹るま鼈の甲
の如きあありて、手足首のぐに鼈まいとよく似う、世人の
スッポンの年経たるものあれうとのふもうぶれり、越後國蠟

崎のそうまてのところやあ夏のあろ農家のうちうぶ家の
内ふあそび居るまま友たちの童きういざ河邊ま行て水
して遊んといざまひ行しまうのさそひま來ま童の親れあど
あうり來しぶ家あるの云今すうまそのうの子息の遊
びま來うとひそれいやとよせれハ風のこちまて今朝ま家
ま卧居りぬいとあやしきとそいひあうとそ後まきけバ
うのその童ま化ていざまひ出たるありというまく上總國
まもあう家の童をその友の童ら來まて川邊まあそぶん
とてまび出ふきうしぶそれ母のいう川邊ま行バまど
あひま佛檀まそあうて飯をこひて行とひつけれバ友

のるべくんあるべやだといひつもり迎行ぬとぞこれも
ろのもてやあん先祖まつりハ厚すぎるべきとや

煖酒

唐の白樂天ろ題仙遊寺詩ま林間煖酒燒紅葉と云ふ句
朗詠ふも載セて人のあるべろ酒をあたゝめ飲めるとむ
しよりのあるべ知れど今世のごく四時ともま常まあたためた
るハあんど延喜式内膳司の土熬堝ハ今のん鍋ゆく上古よ
ひその器もあれど煖酒ハ重陽宴よりあるめて用ゆるよう一條
冬良公の御說のよ温古日録ま又えるべ徳元の初學抄ま
扇ハ四時ともま用ゆるもれあれと夏の季ゆるよ近ごろ酒も四
時ともあるべあ飲どあるべ酒とるべハ冬ハ季まあれるべ
さて酒のんま今燗とふ字をるべハ俗字ゆ酒をあたゝめる
と冷と熱との間ま温ともあるべ間を字書ふよびくんと
云ふ俗字ハ作て燗とすゆ燗ハ字書まもれハ音闌爛
と同じ猶その例をいとゞ俵ハ俵散とてちるとゆ今ハ米苞の
稈ゆて左ともとよくゝ鯉ハ鯛之大者とあるゝ今ハろをとあるる
ハ堅魚の二合ゆ古ハ脯ゆるべのゝ用ひれハ堅魚の義ゆ云ふ
の文字を同文通考ま國訓と云ふ

萬葉集夫木鈔

鬼貫ゆ獨言ま、ゆ名所ゆどま物をもてるる句ハ古歌

ふるくも古事よりたしかなる證據かき句ハつけさせ侍ら、其
いまゞ二十ゐもゐるべきころ、先師松江の翁と梅華翁と列坐の
會ふゝ、

ちよと見ふハちるきも遠し吉野山　とゝ前句ヨ、

腰ふかくべけさげくがらくとつけ侍ら是ハ吉野山ヨ人
くべその故ありてまやと師のそばあまひろよ當惑して、先前
句とゝど句前もとゝ侍るあつぐつくぎ思ふあぶるのまゝつけよ
とひさすゝやされ侍るべよ卒爾のことをいひ出らんと一座の人
の勞ふとゝろも面目ありて、

見ずの華ひさうをさねそひくひさごたづさへ道ひとり行、

とゝふ古歌よすゝりて一句侍るきと當座の作意をもて此歌を
こゝらゝ苔ハ是ハ多づゝしくれハ何よある歌ふゝと尋ら在
ゝるべよ古ゝ萬葉ゝ夫木まて見ゝをいひられバ世ゝ執筆まゝ
せれ侍る云ゝこれらも萬葉夫木ヨハ世人の古ゝ歌多き少ゝヨ
右ゝひて座上をあざむきゝあゝぞゝと見ゝゝ一のまゝ
さもあるべきゝ世ゝ古ゝおりれゝ在きころまでも萬葉集
と夫木鈔ハ世ヨ見人も多れバまやゝの集ヨおきをいひ傳へ
たゝもあゝ今ゝのひとゝを笑ふべ、

樂ゝハタゞ栩の下すゝきをとゝいてゝらあへふのゝて、
とゝふを萬葉集の歌とゝいまさ

秋ゑすびるまきのうるを漬まぜて搦まゆくともよあまくうすれ、
これを夫木集に載するゑしすもたゞひ甘ふべし、

阿伽の水

佛家にて阿伽の水といふハ阿伽ハすなわち水の梵語なれバ重言なるといふ人あれど、阿伽に三義あり、倶舎論にも、阿伽謂積集色等又即六界色等とあるハ詞の例いと多し、是これハ自ことわりとあれど、猶この謡曲に、これハそもそもこれ金山のふもとを重言の如く切ふ人もあれど、こゝハ人の地に金山と径山とありていづれもきんざんと云バ、金山をバうね金山といひ、径山をハこゝもち径山とゐゐておぎれぬためにかゝ云

まことやこれハ書肆にてのり法言うゝ方言として書名をもちとゐふと同例にてこの類世に多し、

餘一

むゝ八第一北子を太郎つぎを次郎とゝひ、それより三郎四郎と十郎まで名つけ十一人めより餘一餘二と次第に名づけ、十八成数あれバ十郎にあたるといふ意なゝ盛衰記に金子十郎家忠の弟金子與一那須十郎資隆は弟那須與一ハ、餘を與に作るハ假借なり平惟茂を餘五将軍とゝふ十五郎たゝ故なり源義経ハ第八子なるを九郎判官と云ハ八郎為朝の成行よりされバ八郎をいとて九郎とゝふ

とゝや、曽我兄弟は兄を十郎弟を五郎といふもこれあること歟、
扨〳〵八兄弟の排行ぞ〳〵るうちよりたまゝ〳〵これをかりゝ
まゝゝか故あることゝあり、

和歌まて狐狸ぞ伏せ〳〵と

物を伏すゝまはそのゝ名をきりて歌よあるよ〳〵あり、北條
氏康は城中まて夏のころ狐鳴かれば氏康のあら歌

夏はきつねまゝ〳〵蟬のゝ衣あのれ〳〵ぶ身のうつまきよ

くれバそのあゝ日狐多く死してあるとゝやこの狐ゝ狂歌咄よ
見えゝう近く横田袋翁のあるゝ人の家は廐は狸の夜ごとに来り
て馬をおどろ〳〵ゝゝ神佛の護符をもつて祈禱まゝおひはゝ

さゝゝのはぎすれどもあゝ〳〵あるゝよ、

心せよ谷のやちゝぶぬきうゝのうゝまもてこそは身も沉むれ、

と一首の和歌を詠じうの廐はもたりあきゝゝよ、その夜よりゝ〳〵
狸のきゝゝとと止ゝるとゝ、この歌は催馬樂の貫河はぬきうゝの
せゝれやゝゝだまゝゝやゝゝふとゝゝる詞まてよあゝとゝや、

岐神

幸神とゝ道路衢神ともひて、二神立あゝびたゝる石像をちまゝま
立ゝと江戸ふもを在まもまゝ見ゆれど上野國は岐路ぞ多ゝ
ずあゝとゝゝ、此像を世は猿田彦大神と鋤女命の二神とゝ
はまもあゝぐゝ知りゝゝものゝゝ扶桑畧記は天慶二年九月

二日丙午近日東西兩京大小路衢刻木作神相對
安置云ミ或供香華號曰岐神又稱御靈未知何祥時
人奇之と又ちよりて拙ハいさの神ハこの岐神の遺れ
るまてあるやと拙ハいうまあん、

手遊

博古圖ハ漢と六朝の鳩車の圖を載て按鳩鳩之詩以況
母道均一故象其子ハ附之因以為童戲若杜氏幽
求子所謂児年五歳為鳩車之樂七歳為竹馬之歡
者是也と又ハ鳩車竹馬ハ童児嬉戲の具なりと漢世
既よりハ吾邦ハもつとも習俗とすその來て最ふる
いふるし猶紙鳶獨樂など童児の翫物異邦とハ同じう
とゝろきハ人情のうつゝなれハなるべし、さて世の風俗ハあるひて
質朴なるハ華美ハうつ鄙俗なるう雅致ハうなるあどさるべ
あるうちふむ〳〵ハ赤本黒本とて金平虎狩桃太郎などの冊子
なりしも合巻とて詞書ハひ繪組といひ今やうの巧を盡し
たるハ紫う筆のあやゆもとき〳〵おとるまゝくそ物りたるもまゝ手
あるそびの雀の笛ハむ〳〵ハちうぬきの小き猿の下ハ笛をつけて
屁放猿と又ハ、その容も名ちゆ〳〵雀の笛たるハまゝ
まて物ゆ、古風の存するものハ小人形ハ編笠きる遊客盆
太鼓すゝ〳〵坊主の人形などなるべ、

両部唯一

神道ニ両部唯一ト云フ名目アリ、両部トハ佛の道ハ密教乃胎蔵界金剛界の両部ト云フヲ神の道ニ合セタルヲ両部習合の神道トハ云フ、その両部を以て神道ニ合セタルヨシアリ、部の字ハ意得ヲ、神と佛とをヨシテ両ト云フヨハ、さてまた唯一ト云フハ両部神道ト云フものあるよいきて、その両部我まゝにさるよし、されバ神の道ハ唯一ハあとよりのことなり、その名ハ両部神道ありてハ後なり、右ニ示シ名を両部ハ如ニ云ふ、あゝず天人唯一の義ありといひもいふ、ひがてふりと云、

楠家菊水の紋

楠正成が家紋を菊水とすることまちゝの説あり、系圖ニハ後醍醐天皇判官をめされ御ゝづゝ菊の華一英を盃ハ中ふうゝべさせたまひ正成ニ下さる、菊ハ千歳ハ功ありとのたまひ、より家の紋と定と云ふ、この説最信じゝ、按ずるニ日本史本傳ニ大平記を引て至櫻井驛以所賜菊作刀與子正行とあるよれバ系圖ニ菊華を賜ふと云ふよりあげき、あゆ、まゝ井出左大臣山吹を愛ー直垂ニ水流と山吹を繍おヤーをいゝ子孫ゝゝうて楠バ紋とす菊水と押りふハあやまり、ありと云ふ説もあれど、これハ云ふもたゝぬ妄誕あり、予ハ云

楠氏の家紋菊水ゝ〻ハ明證ありて辨を待ず、已ゝ太平記の正成が首故郷ゝ歸ゝる條ゝ正成が形見ゝ残せ〻業水の刀ゝふゝとあり、まゝ志貴山ゝ傳る楠家の旗ゝ菊水つきてあり、

その圖集古十種ゝ刀ゝ〻ゝ、この二條ゝて楠家ゝ菊水を用ゝるの證とすゞ〻、安齋の筆記ゝも楠が家の紋ハ菊の華三あり、傍下ゝ流水の形あり、永正七年立雪齋ゝ畫〻見聞諸家紋ゝふ書ゝ刀ゝゝゝとの一ゝ、今も猶ゝ家の血統ゝハ菊水を家紋とせり、

鳥居 松島櫻鳥居之說詳見洋之跡、

神社ゝ建る鳥居を華表ゝ克ハ誤あり華表ハ柱ゝ門ゝあゝゞ、さて華表を鳥居ゝあてゝるゝを切りふゝ華表柱ゝ鶴の巣まり〻丁令威が故事ゝよりて鳥ハ居るゝ〻ゝ切りひゝせて附會せ〻あゞ〻、鳥居ハ神門あゝゝと鹽尻ゞもゝ〻くゝゝ、かゝと鳥居ゝふハ今の鳥居ハ笠木の次ハ横木の名ゝ里雞栖と書ゞ正字あり、倭名類聚鈔門戸類ゝ雞栖切韻云楣 反雞報 今之門雞栖也、辨色立成云雞栖鳥居 揚氏說同ゝとゝゝゝ、これゝてあきらゝあり證とすゞ〻、

東吳ゝふ銘ある水盤

石の水盤ゝ東吳ゝ銘を彫たるあり、その形俗ゝ棹手水鉢ゝふかの如く、その銘の義あきらゝを詳ゝせず、

東呉

杜詩ニ門泊東吳萬里船トヨフ句ヨリ出タル銘アルベシ、

友人靜廬ハ朝鮮征伐の時東吳の地まで行てそこに立てあ
リ石を今捕して來リ形物とあらて摹造しつくるこれハ橋柱のこころ
ありとのふこゝろやきたりやあり〳〵やまゝ出ぬたりとゝ、

長坐する時の心得

實豊卿口傳聞書ニ公事之日長坐之時ハ芥子餅とゝひて
芥子を摺ふくさ味噌ニ餅を入て煮て食すれバ能小便をた
もつ先途の指南ニよりて實豊前ニより節會等の時ハ

食候ニ吉ツ刻ハ三條西三光院内府實枝公の教訓
ニよりて必食と華山院家記ニ相見と定誠卿ゝとあり
れハ去ぬきとありて長坐する時ハ心得て益あるとゝ
ゝ、

樊噲門ふりの辨

樊噲の眥をとゞきむさゝて門を破の圖あり、切ニ蒙求註を讀
誤て為ぬる圖ニハあらぬ、蒙求標題ニ樊噲排闥とある闥ハ
漢の世ニ禁中の門を云る稱ニて、師古ハ宮中小門と云書紀
の訓ニも排闥とあり、これハ高祖の病ニありて戸者ニ詔し
て羣臣を入ぎゝむる時ニ小門の扉を切〳〵ひらき入て諫

とあり、盾を持ちて入たるハ、鴻門の會れ時まて陣營あれハ事急なりとて破るやどの明ハ、おきてぞ別りこの二事を業求註ま併あるべたれハこれまりあやまりあるべし

虎の畫法　畫家の用意

或人云朝鮮の煙洲といふ人の畫る虎の繪を見しに、吾邦の人の名づくるとハ大ま異なり、虎の生る時ハ毛ま黑くあり、朝鮮人ハ常まものあり生る虎を見ること多ま形勢真ま逼れり、吾邦の人ハ皮を見てのみあれハ皮毛を黃色ま彩色し面ハ猫ま似たるものの多くとそ、これま似たる話あり、ある畫家の鯉魚を名づくるを魚商の見てこの鯉魚ハ死鯉なりとそ、そハ眼中の黑眼中央まあり生ときハ傍まよりてあるといふとも、これこのこと畫家ま意を用ひきとそ、たれ〳〵あるべ〳〵鷹擧ま臥猪を畫と同日の談あり、韓非子ま畫工犬馬難鬼魅易といふことあり、實ま〳〵あるべきことなり、土佐家ま て楠正成の像をハ紺地の錦の直垂ま黑革威の鎧ま名づけハ菊水の旗ま添ふ太平記の本文ま引て誰が見ても楠公とハ名づくべ明り、一友人ハ畫工ある方より魏武帝の像をたの求れたるまま半身ハ君臣圖像ま より大きくといへども全身の衣裳ハ制度三國志ま ハ名づくべ〳〵ま名づくんと堂のひとつびハ予ま とされたるべ〳〵予ま席まてハ定なて文獻通考ま ま引て考つる

京九山猪岸畫睡猪都夫見之以爲孔猪云々見慎夏漫卷四

小三國の時ハ服制を改めゞ後漢の制度を用たりと云れたるハ、
やがてそれよりをつけやうたらふくその像とそのハぬときそう、又
或人の人ハ需よりて大原の雛咽疾を云らんまゝその時節の
あれゞまゝハあらひの景物まさしつゝたれハさゞ〳〵とおちひまゐ
らんとそゝハ予云大原の雛咽疾ハ俳書の季寄ふもありて節
分ハ夜のことゝハそのこゝ大原物語とゝ冊子まいでゝ、後まハ江戸
明神の拜殿よ節分の夜男女參籠して通夜するとゝ了、今ハそ
のことおきよりあるといひられハ、さゝハ早梅市どや名ゞんとてよろこび
てゝうぬ専門の業ハ用意のゆゞさゝそありたきものぞ〳〵、

藤豆　鈴蟲松蟲

京師の人云江戸ゆく隱元豆とゝふものをゝこゞまてハ藤豆とゝ
りそハその形狀の藤の實よ似れハ藤豆とゝふゝとゝ江戸よ
てハ藤華よ似ゝ豆ゆれも藤豆とゝゝまていづれもそのことゝ
後漢三才圖會よ松蟲の鳴聲を知呂林古呂林とゝひ鈴蟲ハ
鳴聲如振鈴里ゝ林里ゝ林とゝふとあり、幽遠隨筆よ知呂林と鳴
を松蟲といんと據かきよ似ゝ、れハゝの頃ようゝ流俗蟲の
名を取ちゞ〳〵松蟲を鈴蟲とゝひ鈴蟲を松蟲とゝひゆゝハ
たゝを考へたゞゝそゝゝゝゝゝ松蟲の音ハ松風の凛ゝと響
あゝまたゝたれハちんちろゝと鳴ハ鈴蟲ゆゝ法師の鈴とゝふ
あのをゝる音よゝ似れハれゝ和歌よも松蟲の音を松風よ

たゞつゝゝめるゝ多ゝ、為顯卿百首よ、

琴の音よりふハ峯の秋風をおわまゝ蟲の聲やそふらん

慈鎮和尚住吉社百首よ、

住よゝのいゝきれもの蟲の音小おのゝ聲ふも松風そふゝ、

又延喜七年亭子院の御時西河行幸せさをたまふ忠岑和歌の序よ、山の端よ月まつ蟲ゝゝひてきんの音よあやまらぬあゝ時ハ野べのすゝ蟲をきゝて谷ハ水音よあらゝぶられとゝふゝ、きんの一ゝ音をとゝゝすゝたち松風よあせあゝゝ琴の音よ峯の松風ゝよゝらゝゝとゝめゝゝて谷の水音やとゝ鈴蟲をきゝゝ谷の水音やとゝふハゝゝゝ

傳れどいと信がたし、もろ〳〵の硯は文字を書まぎれは菅公の
御遺誡あるゝとハ守覺法親王の右記は教童指歸抄云彼
抄者菅三品之撰也其條に者硯不可書文字事云〻以著
不用揚枝事云〻聖朝御遺誓之中有之云〻とあるそた
ゝ所ゝ據とハいふべき弄華抄は折ふしのいさめゝやおどろかハ本
說あるゝを考あるべし、まさしく石の硯てはものもかぶ
きくふ神詠ハ聖廟御遺誓の意を後人の讀を詐りつゝ
たゝるゝやそハ仁德天皇の故事を時平公のまゝたまふ高き屋は
のぼりて見れば烟たちたつふ歌を新古今和歌集は御製とし
て載たる類まゝあるとなり、

門ゝ

菟波集は門ぎやうひもれくまゝゝん源義長、身を
捨人はもしの名もなし　崇世法師、この連歌は門ぎとあるゝ今の
名札のとなりハ、これハ門は表札をぎして尋ぬる人のなれやす
きやうはすゝもあるべき歟、

開帳

神佛を開帳して衆人は拜さすゝ、二水記は永正十四年
四月十日、法輪院虛空藏開帳之間爲參詣とあり、開帳
といふ名もあるべきなれり、また開帳ハ大〻三十三年は一
たびするとのやうはあるゝとて、その頃はまれなるかゝ增鏡

瀧のもとに不動尊をのぞくハ伊豆國より生身の明王
れをのかさうち奉てさしあるこゝ、おそしたるき、その蓑笠
寶藏をこめて三十三年に一度いでさるとぞうけたまはると云
てゝをそうゝれバいとふるきよりのかうしまや唐山も似
たるもあり、資治通鑑に、唐憲宗元和十三年十月功德使
上言鳳翔法門寺塔有佛指骨相傳三十年一開開則
歳豊人安とあり、

大田道灌の歌

小道とゝども必見るべきあるとハうゝ取ゝ
いそうずハぬれまゝもれを旅人のあとよりたる野路の村雨、

とゝるハ道灌の歌まて人口に膾炙すれど、ぬれまゝのを
みてたゝのもゝ、ある日彦山權現誓助歟とゝふ浄瑠璃を
聽るに京極内匠がおきゝをゝり討まする條に、世にあ俄
雨ふると日和にあるゝ一時いそうずハぬれざゝまゝを旅人
此あとよりたる野路の村雨、大田道灌よく讀だとつぶや
きゝあるゝをゝまたゝ、とゝふにまたゝゝ世人のひつゝるゝより、詞そこのゝと世ひ
らまゝとあるゝ世人のひつゝるゝより、詞そこのゝと世ひ
て、慕京集を閲するに勝元朝臣短慮不成功とゝふ昌黎
の作し詞をゝ消息のもゝ書付て、古ゝ所ゝをゝ問
たまひしゝに端書ありていそうずハぬれざゝまゝ作

れり、その名ごようう世まハあやまりつたへん、

浅草観音堂の繪馬

浅草寺ニ古き繪馬あり、俗ニつたへいふ此繪ハ狩野古法眼元信の畫ところあり、往年この繪馬毎夜抜をれいで草を食ひうとも、まこと再技江戸砂子ニ狩野玉樂ゞ畫かゝゞとこあり、或人の考ニ此等の説ニ誤ル也伊勢安齋云驢黄物色とのふ馬ハ書ハ狩野主馬尚信の畫くところあり、その書ハ作者駿馬の骨相あるびニ毛色をいはゞ尚信ハ駿馬の畫法を得たりとよろこびて、駿馬の額を多くかきて浅草観音の堂ニ懸たり、その繪馬今ハ存せず、俗ニそれ馬抜をとゝめられて草を食ハいでゝくゝふの是ありと又ある人の説ニ此の繪馬の縁ニ寛永十九壬午年十二月十九日炎焼之時武州江戸之住木村市兵衛出之と記てあり、今ハ文字もうすくありて明あらず、按ニ尚信ハ慶長八年癸卯の生にて慶安二年己丑三月四日四十七歳にて没す、寛永十九年観音堂炎焼の時ハ尚信四十歳にて存命なり、當時在世の人ハ畫あれどもその畫のすぐれたるを賞し、且俗ニ奇怪の話説をもいひつたへる額あれバとさゝ小取出ゝたるものあるゝと、この二説ハ尚信ゞ畫といふをゆゝとすべきとあれど、寛政元己酉年観音堂

修復のをりふしの繪馬をあらくしるすまで、筆者あり左の如し
所想筆と落款あり、されば尚信が筆とも世もてはやす
なるべし、

めでたくうつくしく

今女文まはりあるべく終よめでたくうつくしかりしと定まれるを
是、その頃より古き書にもまれどめでたくしかる詞を消息
まいらせしは源氏物語總角の巻にもしるされば、
うつくしいふ むかしの假名文まあることいふことを同語は
て、俗文の恐多くもぶどく男の手紙は恐惶とうるは同
じ意なり、めでたくうつくしいふ詞は一休ぶれまは親月として都の

町は松ばらうつくし注連縄ぐるうして祝ひをうつくし、されば頭いぐきあり
きたまはるを或人のはてこいつまとやられば返しどぶ、
あくげかきこのされ頭あること多くてこれあり、つまり、
とあるこの歌ぶうつくし一休和尚の詠あるこの詞はうるき證とすべ
し、

茶挽

俗言の轉訛ハこころつくそのまくは唱へ来ると多くは口取の菓子
を茶挽といふハ茶うけの訛なり、甘めのをこひて後茶を飲ば
その味とよろしくなるハ茶のこけは食ものの名なり能の狂言
の詞ハ茶うけと云り帶隨筆は茶うけ口をきよめとい

もはんこうの壁ぬりの手傳をまたうとのふハ指鳥まて鳥をき
す容ヨ似ぶれハあり、さいこうきしとふふハ重言あり、まこ庵丁
刀を庵丁といひ、鬻斗蛇をのことのこいも暑言あり、ふこくも
杉原紙を杉原とだろういひ、こと海人藻芥康富記ハ人え
う、常ヨ田樂鴫焼ハたれもいふとあれど正くハ豆腐の田樂
茄子の鴫焼といふ、ごまあり、鴈ゆどき蒲焼ニ同し例まて暑
言のまこいひあれて人こころの意を得ることあり、

俳諧百韻の始

おろし伊勢の守武山崎宗鑑、俳諧を美てより、玄旨法印
貞徳翁ヨ至てハ只十句二十句のみひ捨まこ定まこ會

席もあり、しふ寛永六年十月下旬貞徳翁の門人西武と
こゝの京都寺町妙満寺ヨ於て初めて會席をまうけ連歌
の式ヨあるこひ床に聖像をかけ香華を供じ文甚をとまこく
百韻満尾すこれ俳諧會席の濫觴あり、其面八句

つゝ綿うゆり桶あり孔庭の雪　松永貞徳
火だちめされよ雪の衣手　山本西武
天人や寒をこゝろゆぬらん　野口親重
満水清きまりの岩ゞね　妙満寺日如
いづくとも泊さだめぬ猟師舩　未吉道節
月いでしふ山の方角　本圧寺日能

竿あり羽うちうちて鳶の聲

糊つけきあさ白つべたろ〳〵

執筆八須賀庄三郎とゝふものれり西武八三條梅忠の町に住

て錦商賣せ〳〵故ふ發句にあいきろあり〳〵や後に貞德翁

れ秘書とゞ〻を西武へ讓られ〳〵八西武亭主ゝ〳〵始て俳諧

の會席を催たるゆ名あゝ〳〵と〻〻、

雜冠井れ今德

馬淵宗畔

めゝやす

今行ゆる長唄とゝふゝひゆのハむゝ〳〵つまきあれまて〻小歌松の葉

きゞに端歌のあゞきを長歌とゝゞゞもその須ゝゝゝ〻ひ來まてゝよハ

あゝ〻、今れ長唄八冨士田吉次 後に根 荻江露友きゞ〻の名人いゞゝよ

是ゝさゝふ世に地ゝゝゝゝゝゝゝ地のれゝゝ今八文句の短ものを

ゝやすゝゝゝゝゝそのゝゝ八すゞ〳〵めゝ〻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゝる寶暦の印本にて丈の長も短もすべ集て女里家壽豊年

藏ゝ題せ〳〵冊子あゝ、さてめゝやすゝふ名義つまびゝゝゝゝゝ歌

舞妓事始に一部の内毎事樂屋ゝ〳〵三味線をなゝす是を

めゝやすゝゝゝゝ甲陽軍鑑にいゞゝゝめゝやすきゝゝゝゝを下

畧〻ゝこれを名づゝゝゝゝゝゝ、これにゝゝゝゝ三絃

をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

どよとゝふとゝぞめりや節の唄ハ浄瑠璃長歌の所作とそうして
俳優の高ちまり長も短もうゝべばの手ぶりのめりやすの大小
とまゝんのまゝうあふといふ意よて名づけたりとゝ云ふいうまぞ
や、

木牛

一友人の兵家云孔明ゝ木牛流馬を實ゝ木ゝ造たる牛馬の自
あめこたりと物りふ〻ひゝとゝあり、明の俞龍徳ゝ兵衡とゝ書ゝ孔
明ゝ木牛ハ獨輪車の別名とあり、物りゝ兩輪あゝくハ間道小徑の
運送しゝやゝりれハ獨輪北車まて人力を助ゝるゝ為ゝ有りゝそのゝ
まれゝ時測もゝるやゝゝ四脚あれハ木牛とハ名づけたゝゝるゝゝと

いゝ、古人の名をおたゝるとゝその形と用ゝふよりて名づゝ
とゝ多ゝ、樂府ゝ客從遠方來遺我雙鯉魚とあゝ書翰のゝ
とゝ乳り丹鉛録ゝ古人尺素結為鯉魚之形即緘也と
いゝ、蘆葉達磨の圖も呉志ゝ伐葦蘆以為泭爾雅ゝ庶
人乗泭註ゝ小筏曰泭とあり、まゝ詩ゝ一葦抗之とゝあゝ
葦蘆の舟村ゝあゝまり訛ゝまハあゝぬゝといふ説もあり、華唇
抑眼まゝ酒池肉林あゝひハ霞のゝゝも雨れあ、艸木も聽
丑ゝ時ゝぞいゝもゝゝ形容の言ゝあゝ丈字と詞ゝ拘泥
してあゝまり解すゝゝ、

三國一の醴

韻會ニ説文云醴一宿熟也又醴甜酒也とあり、甜酒ハあまざけなり一宿ニ熟すれハ一夜酒なるべし、按ニ神代巻ニ、木華開耶姫ニ皇孫幸之則一夜有身とのべ、釀天甜酒嘗之といふとなん、さて富士神社ハ祭神木華開耶姫あれハ一夜ニ娠ぬといふを一宿醴ニよせて三國一まさる雪なぐ富士山ニちなみある名をつけ、木華ハ梅をいハやゲて梅鉢の紋をもつるれり、これ醴ニなるべしを名づけ三國一なる雪醴と名づ、梅ぞちとよびて賣あるくの縁あり、

三養雑記巻三

本柏平

頼朝卿放たまふ鶴
書を傳ふる鴈
がんくちろ口
鳥獣の語
鷺替の神事
十六島海苔
好文木
瓢簞の字義
瓢の種類
藕絲
七ぐんばいそく毛
桃栗三年柿八年
羊羹 求肥
月待日待代待
太々神樂
一まむしよ入道
鞘畫
古池の句

琴唄あづま弓の考
雷公連鼓を負ふ乃圖
木乃伊
天復の古鐘
靺鞨國
七福神
心猿
行基菩薩の遺誡
うだヤし辻池藏
守宮の辯
異骨
多賀城碑の里數
銅鐸
庚申の三猿
西遊記

三養雜記巻四

頼朝卿放たまふ鶴

鎌倉由比ヶ濱ふく頼朝卿の鶴を放たまふと世まあまねくいひ傳へ、吾妻鏡をもとゞめ正き記録まうつくゑえたるものゝ、予が管見まて、本朝食鑑ま源二品之放鶴亦曁五六百年來往于駿遠之田澤偶觀之者謂翼間有金札記年號支干云まさ南向亭茶話九山の條ま古老ゝ物語ふ元禄年中この所ゝ田畑へ鶴飛きさ數日留り居ヤトと度ゝあり、そ其鶴の足ま金の小札あり頼朝卿の被放い鶴のよゝふ、其由名ふ所の民ま

被仰付鶴の留まるい内ハ番小屋をうけ晝夜守りけり由
故今ハ至て鶴場と呼ひよしと見えたり、これ〳〵のとり〻ハ後
人の俗説よりて傳會あるとも有やとも思はれて、其實
ハいかゝあらんと疑をりしふ過し頃頼惟柔の此鶴を詠る
詩を石田醒齋ゞかとまて見たり、彦根侯嘗射一鶴足有
金牌、認其年紀源右大将所放候視而感悼痙之湖
北某邨有鶴塔、余聞此事為作長句、江州刺史田獲
鶴繫金牌在左脚題曰建久某〻年刺史視之忽
愕愕為營兆墳刻誌銘云、この詩よりて年来の疑ひ
一時に氷解せり、世人のいひつたへるも故あきらかならず、

頼朝卿真蹟の日記とて景清が所持せし本を蔵する人あり、その中に
放鶴のことゝ、その日記ハ逆頃ある人の假に偽書なり、

書を傳ふる鴈

鴈足に帛書を係る蘇武ゞ故事ハ漢書に見えて世人の
口實とすること知れり、それと似たる鴈頸に書を繫ぐ善友太
子ハ佛説ハ大方便佛報恩經に出たり、これ〳〵ふ唐山印
度のことゝひゝ故事因縁のたゞ〻ふ〻實事にあらず、
さてその事實なりてたゝえてよく似るハ、叔井日記に爰に
まゝ世に不思議のい、景次黒井次郎判官殿源義經に從て島渡り
すとゝ云ていある時に鴈金雌雄黒井の里に來りてハ
幡の社に遊て翼をれ體も勞をてハ見をくい立ぬるを

あくれば社人あやしみて見るに鳥線を巻きて、
おもをを捕へ見るに飛去るし、その線解て見れば不
思議の札文字のすりて、讀バ願ハ須知孔子孫義まり
て家我起つ、さあらんに於ては我ハ神人なりて是を
守護すべし、文治五ハ景次とあり又斤羽の方ハ故
郷忘れ難き事ども、命ハ義小依て輕し、文字松葉まつ
る心底盡し難し、景次文治五ハの五印とある心を極字小
彫付てあり、孫宜不思議なおもひ攝州の多田院殿
まで達して仰まで仕て須知小太郎景元へ達す、小太郎ハ二
の木札まりつけたる心を至極まで達し大まよろこび

是を祕し、さてハ判官殿ハ未世まりにて景次も生てあ
るとて獨見して、孫宜ハ是を景次高館殿まで取
後の時ハ云てはまハ弓取れ道ハ、そこ涙をかゞ、
景元孔雀金の鳥ハとひ見れバ、ハ勞まくを餌ば劍
水まうたもて奉とふ依てそれあるとて景元受ていさ
ちまま二鳥いろ強くして餘日を過ておちてゆくこ
の線つきて結ひ物を見れバ扨ハ五印とあ
る時ハ數ハ五風まてうれて、おくてはゆ又ハ別の鳥ハも付て向
ふの神變奇特と感涙をかゞ又鳥ハよく物いふ人
ハ却て道をあるぬまくれと見えて、鳥の玉章ハど歌ま

もゝ名どゝ、かゝ三國ゝ日ゝうて鴈の書ゝてゝゝものあゝ奇と
いゝゝ、

かゝゝゝゝ

童子の口すさゝゝ、鴈ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

事因選人丁潔典、とりとそうう、猶鳥獸の語を解すること
ハ東谷贅言ニ介葛盧識牛鳴陰子春識鳥音ニ戸卿祝
鷄翁養鷄數百羣各命之名呼之則應まる唐闕史ニ
公冶長通鳥語ニ介葛盧辨牛鳴ニ著在格言ニ固非妄矣、
感通初有渤海僧薩多羅者寓於西明精舍ニ云能通
鳥獸之言ニ往ニ聞烏鵲燕雀啅噪則說休咎及問巷
間事如目擊者とあれどその實ハいかゝあらん清絢云人
鳥獸の語ニ通ぜず鳥獸人ハ語ニ通ぜず鳥獸の語もその
類ニ聞ハ定てこゝけなるべしといふ人あり埋ハさもあらべしされ
とそれ實ハ全ゝ田文が客の雞鳴をまねびて秦關ニ

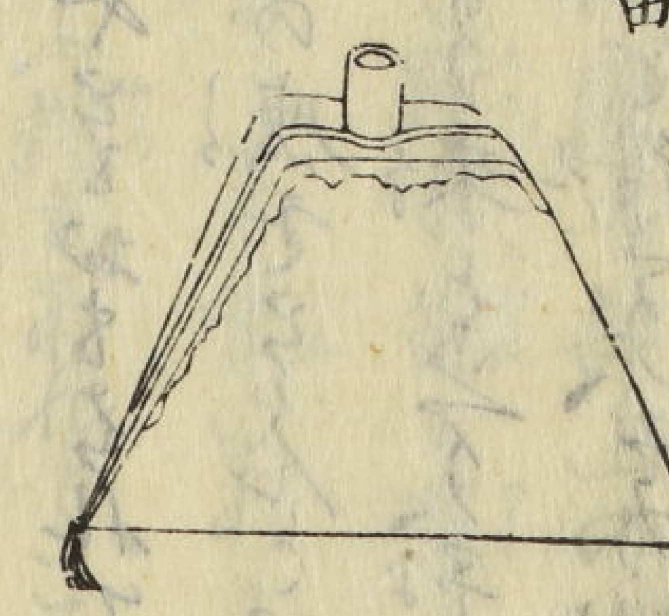
け危難を免る既ニ徵とすべし市町ゝ童どもあつまりて
犬を喚ニあるひハその毛色をもてすあるひハ人名をとりて
あるひハさまゝの異名をもて呼ぶに聲をきゝ知りて走きたるまゝが
舅氏のつくれる小竪後園ゝ百舌をおとす囮の頭をと
らゝてひとゝふまでも鳴ずゝの小竪百舌の鳴聲をまねてキ、
と鳴らゝ人ニ隱るゝ孔聲を聞ゝより喬樹の上ニあるゝ百舌の
囮を見つけゝ飛來りたゞちにつゝ先年京師ゝ鴉のまねせゝ
乞食あり一度鳴バ多孔鴉羣ニ集るあれゝを見まハ彼類の
語ニ聞けなきとゝ考べゝ動と之が馬止り止と之ゞ行馬ハ
耳孔獸といひて昔よりめでゝきゝとのますれども何ぞその不文

あるやと、孔雀樓筆記ニハ、この説ハさることなり、
ハ今狩人の鹿もあれ雉子もあれ、それ鳴音を笛にまねバ
同じ輩と思ひてよりきたるものとぞ、たゞやくつれ草ニ女
のたゞらあ〳〵だまて作まる笛ニハ秋の鹿うゑ〳〵よるといふ
傳へ侍るとの事、この女れあぐふく造れる笛の事いゑる故
事うあり、たゞふるき誘ニハいひつゝたゞとぞ物りて或
云三河國安部山の人都ニ登り名ある遊女のたゞらを履て
ゐりて歸る笛ニ造りて阿部山の中ニ入り是を吹ニ鹿ハ
多くよりて常のあ〳〵だまく作る笛よりもまさりて高くあ
るといふ説もあれど、こハたゞ〳〵草ハ文ニよりてまさりけるこ

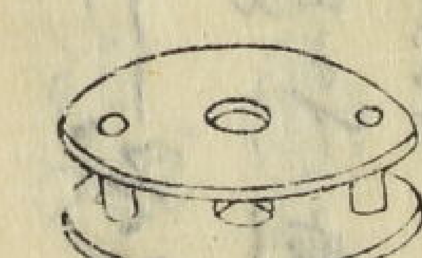
とゝやらもなもれておぼつかなく、そなたあれ高くより
狩人の鹿をそゝんとなりふ時ハ笛ニて鹿の鳴音をまねぶとき
ハ自ずから来とぞ、予ハ上総國ある者人ニあつらへて
鹿笛を得たり、その製鹿角なれども又ハ木ニてもを造り鹿の腹
おりの皮をもりて吹ゑんと思ふ時ハ水ニ浸し張たる皮を
潤し左右ハ手の指ニて皮をこきつ吹バ、まぐ〳〵鹿鳴を
あたゝと真ニ遍きり、その形ハ[illegible]くの如し古代の馬ハ焼
印ニ鹿笛ニいふもこの形なり、吾邦のみなるべ唐山印度ニも
笛ニて鹿をそゝとあり、太平廣記ニ江陵拉滋技江
村射鹿者率以陶阿鳥骨為管以鹿心上脂膜作簧

吹作麀聲有大號小號之異或作麋麀聲則麋麀集
蓋為壮聲所謂人得鼓矢而注之とありまた心地觀
經にも心如野麀逐假聲などゝ見えたり鳥をも笛にてよ
することあり雀笛ハ常に目なれてめづらしからず越後にて雉
笛あり

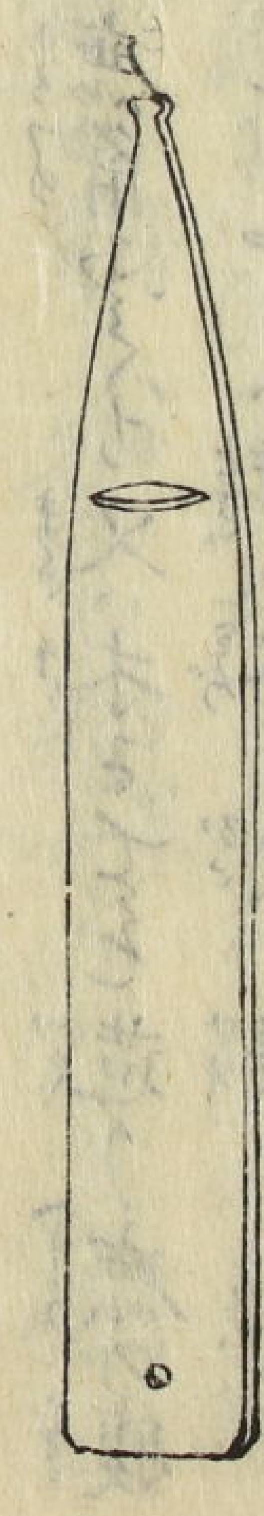
麀笛



雉笛



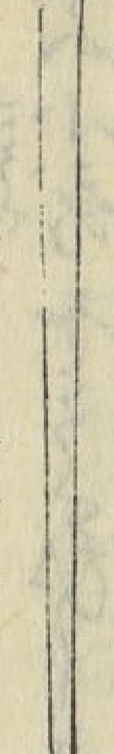
雀笛



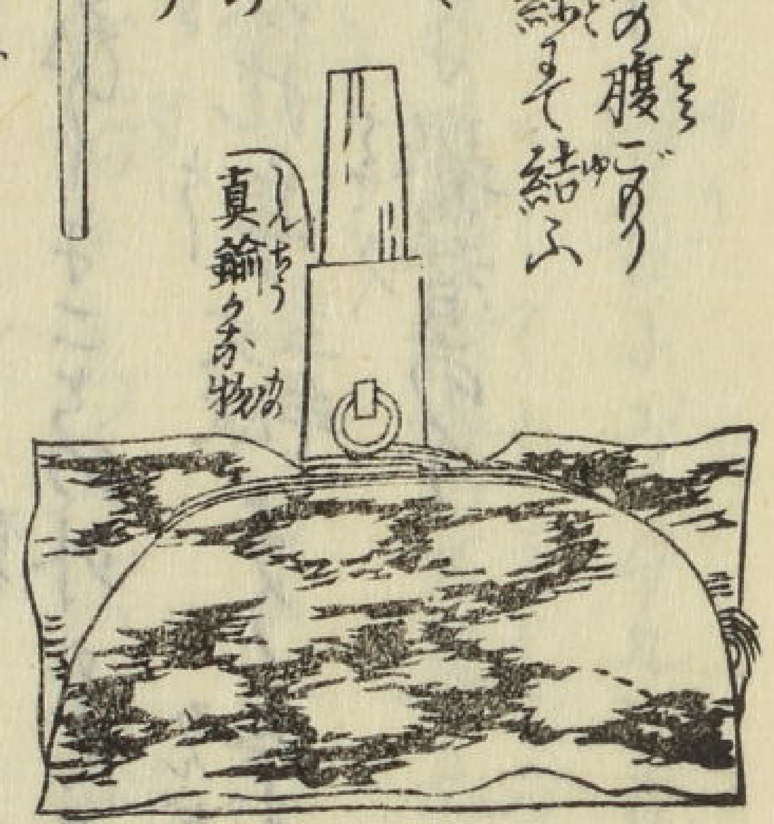
右三品いづれも大サ圖の如し

麋の角にて造り麋の腹ごもりの皮をもちひかあん緒にて結ふ

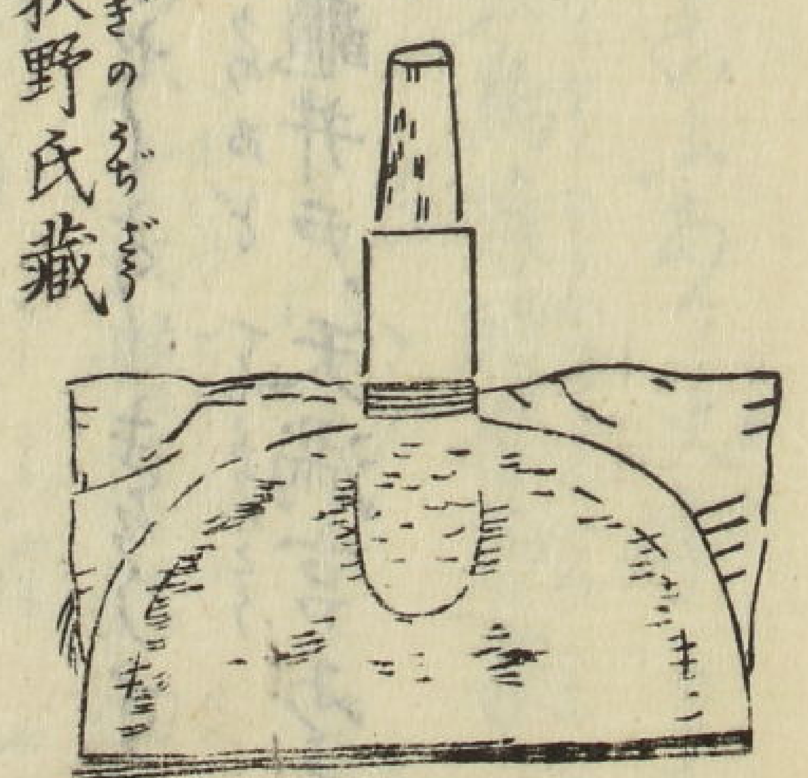
真鍮にて造りしくぎの如きものをそへてあり



表



裏



荻野氏藏

鷽替の神事

筑紫の太宰府にて毎年正月七日の夜酉の刻ごろより鷽替の神事あり今ハ世にあまねくしるところなれどもむかしハさることをしる人まれなり貝原益軒の筑前續風土記及び天満宮故實などにも見えざれどもいかゞしたるにや太宰府畧記に参詣の老若うちつどひ來て木にて作りたる鷽の鳥

を調へ相たゞひよ袖よりそうくんと剪りて雙方より
取ることゝ有りとあり予が地の鷺をふるまぞとりよせて
も近ごろ文政二年大坂の天満天神あゝ宰府まあひく
あの神事をたゞめて執行せーとき大坂みてのちあり唄ま
こゝろづくーれ神さんぐうをまとる晉さんすゐんま
そぐへおくまーー
そのふ小雨をうゝひーまこゝとの外ゆてやせーよーきゝうさて
江戸ゆてもその次れ年文政三年より本庄亀井戸天満宮あゝも
毎年正月廿五日ま鷺晉あゝ
十六島のゝ

出雲國よりいづこ海苔よウツルヒリとゆふあり、文字まく
八十六島と書ゝ、讀耕齋文集ま十六島藻贈金節書一
篇あり、名義の釋もゐゞ又西まどゝゝゝ案ずるふ懷
播談ま十六島を俗ま六ふひ島といふ十六權現影向の
地ありとて水底ま氣味よゝゝき海藻ゆゝ三瓶山ま雪
降てこの浦へげゝる時ふあれ海藻を採まバゝゝと
語る世これをゝよゝひのゝとゆふ古記ま北浦れ雜物を注
すとゝゝゝ

うちふひのうと云ぐきをだにたる聲はてうふひといひ、十六
善神島れのうと文字は書てハ言葉あゞ〳〵き故は、善神
を畧して彼俗言のうふひと云とるのまゝ文字はよゝ
ゝ〳〵たるものとゝ云ふとゝ云ふ人うゝ黙頷ぬといてハこれは
て名義いとあきらかなり、

好文木

梅を好文木といふとハ、軒端梅の謠曲はありて人の知る
まゝども唐土の書はハたゝて見えるとゝ見れり、卧雪日件録は
見えられへふ〳〵故事とすることあるべけれ、さてそれ来所て
謠古はゝ、好文木晋起居注云哀帝讀書則四時隨

之開華故好文木と云あり、また東見記は、梅云好文
木故事在晋起居注晋武好文則梅開慶學則梅不
開云とあり、武帝哀帝いづれゝ是ありや、説邪おどろも
起居注ハ多く収められど、好文木の事ハ見えず、

瓢箪の字義

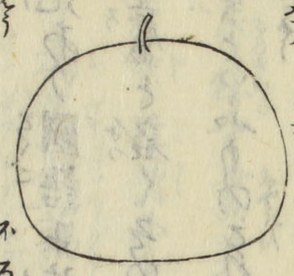
俗はひさごを瓢箪と云ふ、瓢ハひさごをいふまでもか
ゝまど、箪ハ竹のゝ籠なり、瓢とハ自別物なり、されば世はひ
さごを瓢箪とよぶハひごとあり、されどその来るとも亦ふ
一運歩色葉集は瓢箪の熟字あり、室町殿日記は功徳水
を汲瓢箪に入まどいふとの見えられバ、天文のころより已

よいまゝ〻ぞ世ゆ〻〻、今熟字のよりて起るよりをおりつよ、
播直幹乃文ふ、瓢簞屢空艸滋顔潤之巷藜藿深鎖
雨濕原憲之樞とゝふ句、朗詠ふも載たれバ人口ふ膾炙
してあまねゝあれゝ一聯あり、おもふまこの句ハ常ふとゝ
あれてゆゝ瓢簞をひさごの名ふ熟字のまゝよりあゝる
と世ゆ〻れゝ、あと瓢簞ハ一簞食一瓢飲よりいでゝる文字
ゆゝ、唐土ゆてハ簞瓢とつゞけたゝといまゝ人えゝゝ、

瓢の種類

瓢ひさごハ種類あり、その水ふ浮ゝて泡の如くまゝ漂
ゝぞくあれバ匏と瓢とをつゝ

和名フクベ

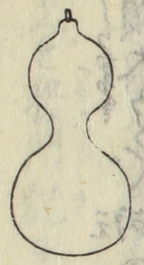


その形長ゝ越瓜の如く首尾一の
ゝゝゝゝ大あゝゝゝ形を瓠とゝ

和名ユフガホ

小ゝゝ細腰のゝ形を蒲盧
ゝゝ葫蘆とゝふハ非ゝ

俗ふ云ヘウタン

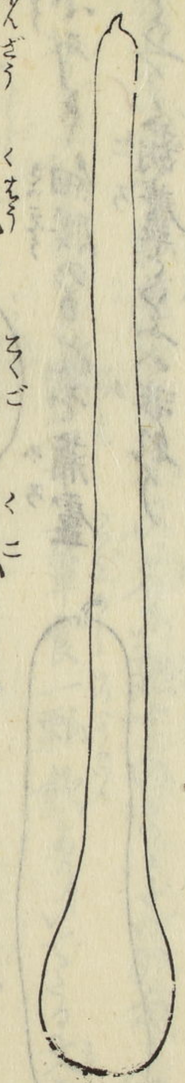


同ゝゝゝふて至て小ものを
藥壺盧とゝふ

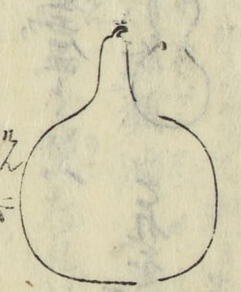
これを俗ふ
センナリとゝふ

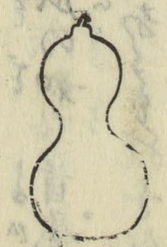
匏ニ似テ圓ク大キク短柄の
あるもの壺ト云

匏の頸大クシテ柄の長きもの也ヲ懸匏ト云



本草ニ苦匏あり國語ニ苦瓠ト云ふ
綱目ニ苦壺盧ト名くその味膳ル如
一詩ニ苦葉ト云ふものこれあり
和名ニガフクベト云ふ





藕絲

藕絲とハ白絲を貴美ていふ名なり寶の蓮藕の絲ハ
ものゝ藕絲北字杜詩ニも見えたり前燈新話の採蓮曲詞
ニ張蓮葉ヲ為蓋緝藕絲ヲ為衣とあり注ニ藕蓮根故
翁詩綱腰美人藕絲裳言白紵之精細也とのたまへり
ものゝ中ハ吾邦大和の當麻寺縁起ニ中將姫ハ蓮の絲
ヲ以て曼荼羅を織たりとあるを世ハまことの蓮ヨリとりたる
絲とあり〻ど將門記ニ蓮糸結十善之夢まこと運歩色葉集
ニ藕絲袈裟なども有ども藕絲を訛て運ニハあらぬ實の
藕絲ハ水氣乾バ粉碎とあり
機織の用ニ充べきものとあり

七難ゞそゝ毛

本朝國語ニ伊豆國箱根權現の什物ハ中ハ悉難ゞ揃毛
あり、これ何ものといふを考ゝ、又下総國豊田郡石下
村東弘寺ハ什物の中ニも七難の揃毛とゝふ有あり、いろ
五色ゝて長四丈有餘いまゞ何物の毛ゝとを考ゝ、相
傳江州竹生島信州戸隠山ゝもまゝあり、以て什物とし、
往古異婦あり七難と名ゝその人ハ陰毛ハ八ゞ塵塚
物語ニ竹生島七難の毛を載すと又ゝ、ゝ八長物の
とゝ名ゝ引いでゝいひゝとゝ又ゝ、尤草紙の長をゝ
ゞゝ、七難ゞそゝ毛とあり物産家ニハ山婆毛とゝ

ゝとゝその實ハゝゝそゝ扶桑畧記ニ治安三年入
道前大相國詣紀伊國云云御本尊寺開寶倉令覽中
有此和子陰毛注ニ宛如蔓不知寸尺とあり、この毛も
の七難ゞそゝ毛ハ類ゝん

桃栗三年柿八年

諺ニ桃栗三年柿八年柚八九年ニ成りゝとゝふハ果
樹を殖の決あり、為憲の口遊ニ桃三栗四柑六橘七柚八謂
之菓子頌令按桃樹栽後三年結子他准之可知と
あり、これ口遊とゝふ書ハ天禄元年の自序あゝバその來を
ゝゝといふゞ、埤雅ニ桃三李四梅子十二、桃生三

按此文見執苑日渉九卷
鄉食糖吹糖
纏糖條下、

歳放華果早於梅季と云てまさ曲浦舊聞ふを、菓子易生者莫如桃而結實遲者莫如橘諺云頭有二毛好種桃立踰膝好種橘蓋言桃可待橘不可待とあり、和漢同轍とゝ云べし、

羊羹　求肥

執苑日渉に羊肝糕以紅豆白糖成劑牛皮糖以糯粉糖滴為餅と云り、菓子の羊羹求肥ハ羊肝牛皮と書こそ正字なれ、羊の肝牛の皮に似たるよりかく貫せ名なるべけれども吾邦の俗獣肉をハ不潔のものに比するふ四足にやくよりあき文字ハ書改しものとおもはる、さく

羊羹の名より百合羹やうかうの羹などの名のいできたるハ轉訛とゝ云べし、求肥もつねに求肥飴と云を信濃あたりにて求肥餅とよぶ、そハ遠國にて所によりて飴屋と什細工する者ハ市町に居しあれ宿にこれを住しむる掟あるよし、よりて飴とゝふ名をいにして求肥餅とハいふとゝ、これよりきて出ぬ、松風とゝふ菓子ハ堺にて、嚢栗をとりてこれを浦とてこまかに切て、松風とゝふ名いつれとやいと風流なる名なり、さを切てこゝに嚢栗をとりて両面松風と名づけたるにて、拙しまく田舍おこしとゝふハ田舍めきてその製ハ質朴なるよしの名にて、鄙たるをとりて風流よせしものなり

うをそれよりあらひて在郷たちと名づけたるハきこえず、田舎ハ田井中なるよりなれハ常の詞なも田舎へ出くとハいふべし、在郷ハ在郷めとハいとど在郷つゆくといひて、義をあさぐるごとく、こゝよりて襲すゝを在郷といふまゝきあり、うゝとまでも物名をつくるハ名義のうるふやうよりすゑきことなるべし、

月待日待代待

辨才天を己巳ハ祭を己待といひ、鷲大明神ハ十一月酉日ハおうつゝを酉待といひ或ハ月待日待庚申待廿六夜待などの待ハ俟の義なるべし、まつれ約語なして祭祀の義なり、

安齋漫筆ハ月待日待の待ハ祭なり、ツリれ反千とあるべ

あきらゝあり、子待ハ子祭己待ハ己祭なるべし、さて淨瑠璃節の文句ハ月まち日まち日まち代まちとあり、この代まち月まち日まちれ例ゆゝ代祭とうたふて、代参代垢離などの意なり、ゆゝハ今の代神樂れゝ町ゝを勸進ハ來れば、されハ二見真砂とうたふ伊勢音頭のうたひものをあつめたるものゝ中ハ代待とうたふ音頭あり、その文句ハ、

町ゝをすめて通る代まちハおいそゞれ身ハうる先

三日月の代まちハ弓鎌のあり鉦屑ゑびすのまつる鉤ハ

ゆけ奉る立願ハ花のゝ士農工商の未繁昌れきねんす、

とあるまゝくも世りゝ、紫一本ハも山伏ハ錫杖ゆて代僧

代参とよべバ参と見え、人倫訓蒙圖彙も庚申代待あり、ゾ
きも代まちハ祈念する人ま代て祭よーの舞あり、代神樂と
いゞものもて右ハ山ゝ代待の類まて神樂を奏すべき人ま
ゝりて奏するよーゝのもとあり、獅子舞ハ田樂などのごとくまぎ
れバ今も一万度の接をバゝるゝバそろあひあり大神樂とゝ
くいあゝゝす代字を用ゆゞ、

太ゝ神樂

太ゝ神樂とゝふとハゝのゝどよりゝ始まりゝん、都鄙とゝゞ
ゝゝゝゝ太ゝ講とゝふとさんま行はれどゝ太ゝ神樂ハ
既ゝゝゝ代神樂まゝゝゝゝ

大般若経などの札といふりのハ古れ巻数の巻ごとまく、その
札ゞたゞきまハあるねど、巻数ゞ多くそれもそれをや
ゞて尊信すゝとかゝ、この巻数ゝ倣て千度一万度の数を
そて幣串を祭主へ配とゝ取りてといやゝまさて、
かゝ、

（まむゝよ入道

寄跡考ゝ、ゝゝゝの戯ゝ名ゞ（ヨムシ入道ゝるきゝや、山の井ゝ
望月れゞを名よく似ゝる物と取りひあとせて、
繪ゝ似たるゝるや（まむ）よハの月　雑屋立圃
右正保のころれ吟ゝるゝ、ゝゝゝゝれどこの（まむ）ハとゝるくゝ

ゝ（ヨムシ）ゝるこゝかゝと歩ゝ、ゝの四百ハ青蓮院ゝ（まむゝよ入道の四百
年以前の物ありその筆者ゝ（ヨムシ）惜ゝゝと達磨軒隨筆ゝ
ゝとゝゝ、まくある筆記ゝ、葉室大納言自畫自賛のゝゝとて、

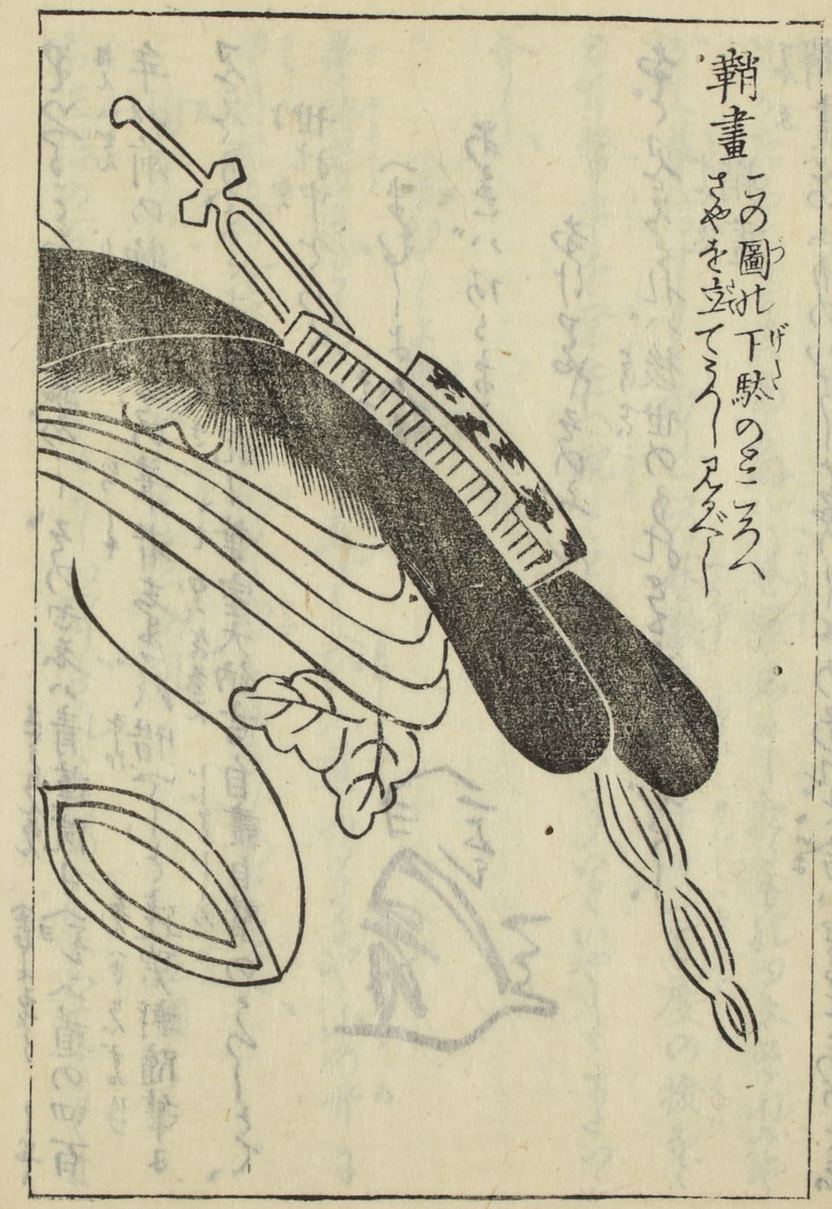
世れ中をらくゝ
（まむゝよ入道
あまゝバゝるまゝ
あけゝゝやゝのゝぶん

ゝゝゝとゝれバ後世のゝれゝゝさゝんがゝ、

鞘畫
鞘畫ゝのゝゝりのむゝゝものあれど、今ハさゝとあゝと名

らぬ人もあり、よりて左ふその圖說をあそこに載す、

鞘畫　この圖は下駄のこころ、さやを立てるゝ〜ゑなり、



、池北偶談曰西洋所製玻璃等器多奇
乃曾見其所畫人物視之初不辨頭目手足以鏡照
之即眉目宛然姣好鏡鏡而長如卓筆之形云熙按
今西洋畫有初不辨何狀以光髹刀鞘照之即人物
鳥獸宛然如生者俗謂之鞘畫此王士禎所謂以鏡
照之者也と又云ふ、

古池の句

嵐亭俳話に芭蕉の古池やかはづ飛こむ水のおとといふ
句、ご駘が廢宅詩に、放魚池涸蛙爭聚といふより案を
ゑとめられしもあらず、此落句は不獨凄凉眼前事咸陽
一火便成原と作まり、燒あとの深川はあらび住しころの
吟なれど、此感あるもとるもあるべ
くもあらざりけり、

琴唄あるまゝ弓の考

あるまゝ弓のあやまれるべきはそもそもで八十の翁の戀は腰を
そゝるとかいふる琴の唱歌をもつて人ふる志賀寺の上人は
京極の御息所をこゝめて戀ありしことをつくりまうけし
ことなれど、その上人は故事は八弓はよりたるをとるく
ゝ、かと琴唄は一節は中はこれはそうあるとしたる
旨趣かきそと多くれば、はりかはあるまゝのまゝ弓のそゝまく以續

たゝ八義經記ニ實方中將のあづまの野邊の草まくらすゝきかるかゝ
ハそゝぎこゝやしきとゝめりんあづまの野邊をゆて過とゝ
をあり、この詞をきゝるゝ實方の故事ハ後拾遺
和歌集ニ、くさらひたゞりる人のゆとまこちの國より弓をつ
ゝとてよきたゞりる、藤原實方朝臣、

こちのくれあづまのまゆきこゝふこそ切りひためこゝとゝいろ
とあり次ニ八十の翁ゞ戀ニ腰をそゝゝとゝふハ志賀寺の上
人のことをおもゝりて作意セ、りのとゝ切りとゝ再按すゝ
ニ貞德ゞ淀河ニ琴の唱歌ゞあそぶ夏の日とゝふ句ハ自註

ニ琴の志やうニ句ゞあそんの地藏ゞこのよ腰をそゝゝとゝ
とゝりとゝふこと見えこゝ、これバ琴の唱ニこれ小家あ
ゝ今の組歌をつゝゝこゝ物語ゞの詞まゝ合セつゝ
まゝのあゝゞ、と切りたる、

ゝらゞせんの地藏

ゝゝだせんの地藏とゝふことゝその世ハとゝゞゝもいひゝるとゝ見え
たゝ、東海道名所記ニゞ地藏のことをいひゝ地藏ゞまゝ
神通をゝゝあひゝびをきゝれてゝゝだせんゞゝハのこゝたま
ふとゝあゝゝゝゞせんハ佉羅陀山とゝきて地藏菩薩の淨土
あゝ延命地藏經地藏十輪經等ニ見えこゝ慧琳音義ニ佉

羅帝耶山梵語山名也或譯為驟林山十寶山之一山也と
云へり

雷公連鼓を負の圖

雷公を畫くに連鼓をもめくらす圖すること王充論衡に
見えたれども世人のあるところ多く観世音菩薩の眷
屬に風伯雷公あり金剛阿吒婆倶經に雷の連鼓を負ること
見えたれども圖像抄なども亦連鼓をもへる圖あり論衡
に俗説と云へれども佛説に出でたるなり連
鼓を負する圖は法華經の普門品に雲雷鼓掣電の文より
てその聲を響を形容したるものとあるべきか

佛家には猶ほ疑ひ惑あるべくや再考すべし遮古遺文に古篆に
雷字を〇〇〇〇の如くに作へ何とか連鼓のごとくあるべ
おもふにその窮理説は氣海觀瀾に夫雷鳴卽越列吉的
爾之逆炸而與礮聲同其音與雲反響斯聞般〻云もの理
に於て間然なし因云佩文齋詠物詩選に山上に雷を聞の
詩あり宋蘇軾云唐道人言天目山上俯視雷而每大雷電
但聞雲中如嬰兒聲また顧豐堂漫書に夏日晦菴與客登
顧見山下白霧彌漫若大海然而山頂赤日了無纖翳
俯視尖烟暴起或丈餘遽至尺許亦無所聞頗異之
從者以為雨作也及下山村蕪人云適有驟雨挾震

雷數百已過矣、向所見烟・中突起者悉雷也凡聲自下聞之則震自上聞之則否所謂山頭只作嬰兒啼者是已ことゝ〻、富士山をそゞめ諸高山いづれも此趣ヨ異なることれ〳〵文章の妙よ〳〵その見聞のまゝを〻ろ〳〵得ゝ〻ゝ〻〻、

守宮の辨

あるゝやゝう二蟲名實をあ〻る人問ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ云昔より守宮をあるゝよ充ゝと的當あ〻ゝ〻、漢書顔師古註ヨ守宮蟲名也術家ゝ以器養之食以丹砂滿七斤擣治萬杵以點女人體終身不滅若有房中之事即滅矣言可以防閑淫泆故謂守宮也とあゝれバ今のやゝうヨ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

足脩尾丹腹狀如守宮といふまゝ、その名と實とあれ
ども、いるやをもゝずあり、訓ハ井守の義なり、井に住
の意なり、井とハ田に灌流をもふ今ふ用水なり、常に溝を
渠をもいで田にまゝるまゝぎりて井とハいへ、その流をせる
井堰といひ、井まろを井杭といふ田舍をゐなといふる田井
に住よりふくゝふ井より屁ふる名なり、今ハ堀れる井のゝ人れ
目なまゝれハ用水を井といへをめゝゝ井字ハ
ゐと、井田より出る象形なり、書紀なる神代巻の天真名井
をそゝゝめ、萬葉集のあゝゝ山影ゝ見る山の井とも、ひまゝ
落たゝろもゝ井れ水なとなるゝよゝふよゝゝをゝあゝゝ

ゐ蜜ふ蜜ゝ、

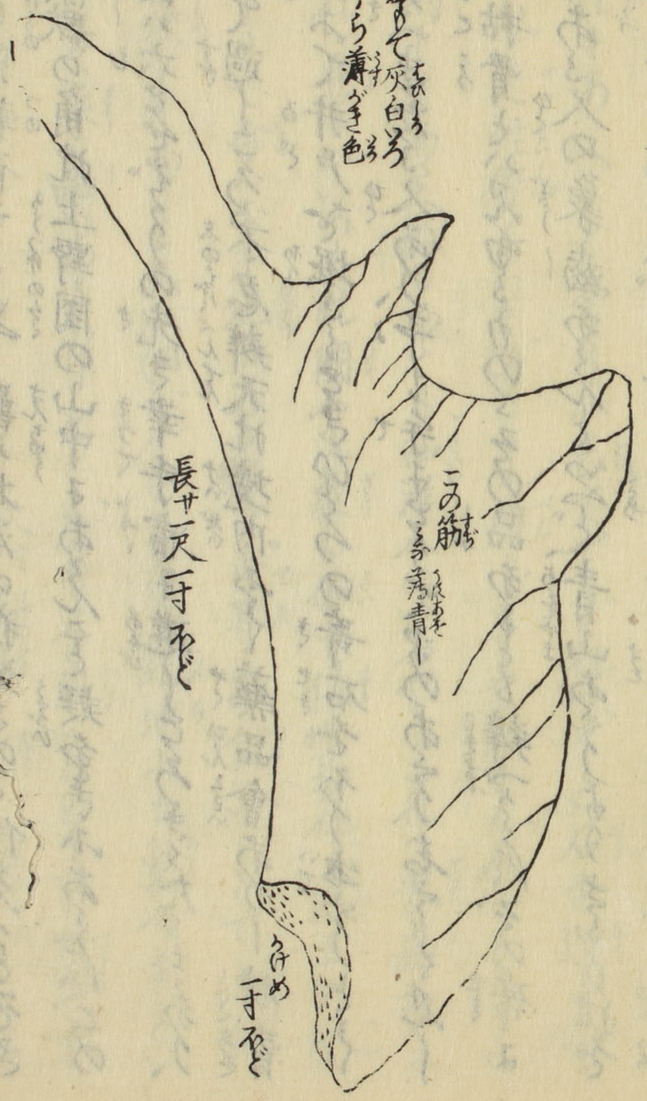
木乃伊

ミイラといふ蠻藥一名蜜人とも、この藥名人口に膾炙し
て諺ふもゝいゝ採のゝいゝふあゝとあり、ミイラハ木乃伊
と書り、輟耕録に見えり、綱目ふも出り、右れぞ實ハその
性のゝれぬれれ故にゝぐゝの說あり、摺林雜話に木
乃伊本名ミエウミヤアといふ（國の名）「ハルミヤ」ぞより出る、れ
ハバル丹モといふ藥を人の尸れ腹の内につめおゝときハ何年を
歷てもその容打齊するとれゝ先祖の形容をおゝ存せん
とするものハかくの如くして箱に入てゝれ尸を貯こまを多

あづかり寺の如き館あり、その中に印記を見出し易くすべの中にも子孫たえて入用あきハ戸を其館主山野に埋蔵す、後これを掘出したりの木乃伊れといへり、おりふしのハルサモれ藥氣戸の總身にいく年とあるともたるも功能あるべし

異骨

上野國安中宿の南なる黒岩村といふところに遍照寺と云寺あり、寛政年間そこより異骨を掘出せり、その頃江戸へ持いでしあるねく人に見せ名を問に曾て見るものあるべしと幸に阿蘭陀人の來りあいせたるまの異骨を見せ



又せきしるべに云ふ漢韃爾干といふ獣に角あるよしいへり
金子竹香のものがたりに、

の漢韃爾干といふる獣ハ北海の狄地にのみ住みてぞさ
る獣の角ハ上野國の山中まあんと疑あきふあるべ、この
話ハ六ヶ敷ぞろの先き幸手宿ハ遊ぶ所きたるもあり、
さて過ぎしころ不忍辨天ハ境内あく藥品會あり時青
山ふて井戸を堀るときひとつの奇石を掘り出すとく
携へきたる人あり、予も手まさりてあのあうちくゝ
ゝ、枯骨とハ見ゆるかのその品あやとも辨ぜ、その席ハ
てある人の象齒あんといひど、青山あうよりさるかを
堀出すものゝねばそれとも定うねく過ぎしかしその後一
友人のいふ西洋人の長崎より江戸へ來る路のゝどおて、播

磨の海濱小ゝつきそひたる人ハ奇しき石を拾得て、人、西
洋人ハこゝ何といふ石ぞと問しかどゝ、ハいらくハせてその石
ハ見れはあゝ人よとあきりふ乞てやまざれバさゝふ石を贈よあ
するゝどに性質をつまびらゝ辨じきりをたまはれりとゝ
多約してあゝぬるゝどハ、西洋人のいふやうこれハ象齒あり、
あゝれる世ハいつくれ國ふる象も犀も住しゝれど風土の變
化ハよりて今ハあき地もあるれり、世界ハ今ゝとて上古
より決してゝとハいひがきとゝ此地ふも象のまくく
れバこそ象齒ハあゝるりとくたゝ、を引こを見ゝを盡ても
のゝうぬとぞこまてよりて智人が上野國の獣角青山ハ象

齒も疑べきまでもあらざれ、ひとゝあり あるゝ天地開闢の生ぞ、いハゆる
禽獸なれバ異國のこと限てすめるものゝ定めがたし吾邦の
上古ハ住なんもたゝり知べからざれ、夏蟲の氷を疑もとゝ
きふあらざれ、近きを居て遠を識今を處して古を知ハ惟りの學
ハたゝまこそあれと古人のいひなんハ確言あらずや、

天復の古鐘

過ル文化十二年の春西遊せしころ、豐前國宇佐八幡宮ふる
古鐘を見るに、そハ御供所といふところに軒ふりけるつねに用
ゐる半鐘なりその製ハまさく尾上の鐘遼の太平鐘と同じく
たゞうち小なるのみ、銘識あれど左文まてとゝ漫滅て讀へ

らざるとゝ云ぞ、天復四年甲子とあるをもて即一本に揭して
歸れり、按ずに天復ハ唐ハ昭宗の年號にて我延喜四年にあ
たり、實に希世の古物ふて珍重すべきものなり、遠境僻地
ハ好古の者もいまだ搜得ざるも往てかきまあらば、狩谷掖齋ハ
朝鮮鐘なりとゝ云、

天復四年甲子二月廿日沐山林
大唐小沐山文藝本作土沐沐本林主
蓮華一合人金壬午八十二〇八〇鼎

多賀城碑里數　靺鞨國

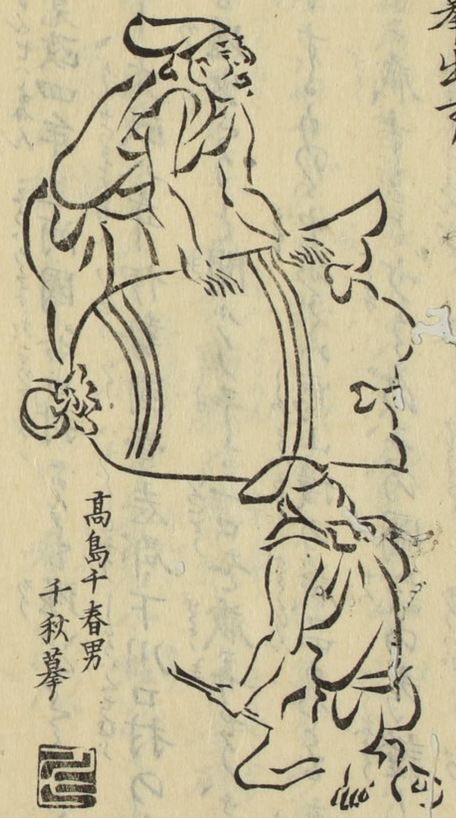
多賀城碑より里數を記したる中に、常陸國を去ること四百里と、ほのゝ、三百里あゝでハ路程よりあがさるものゝ、たゞ〳〵碑文よりあれバいかゝもとゞきまゝ〳〵、まく靺鞨を去ること三千里とある靺鞨ハ朝鮮よりハたゝちよ奥地よて今の滿州北地方外、朝鮮ハ北に鴨緑江を隔てゝ其境おのづゝ別り唐書に、高麗地西北度遼水與營州接北靺鞨有馬訾水出靺鞨之白山色若鴨頭號鴨緑江特以為瀆と見えたり、史を案ずるに吾邦へ往來すること絶す此國の人多く佐渡出羽能登のあたりまゝハ蝦夷地へ著岸のことおゝ見え

たれバ北國より直に海洋をゝたりて往來せしと疑ハゝるゝ、むかしハその國ハ船つねよ北國より來りて多賀城碑に宮城郡西と書たることもあるゝ、さてその碑を寛文のころそれ國の太守募りとめゝもて、多くの人夫をうけて堀いでゝるよりハ世に知あまねく知られども猶それより先ま文明のころひとたび多賀城碑をあらいでゝやゞて埋たるよ文禄清談まゝ見えたれバそれ話を古老のいひ傳へゝたるまよりて大守もつのりをとめられしまゝそ、およそ地中ハいるあるものゝ埋めれあんもまゝるゝ、近來河内國より石川年足卿の墓誌いで、大和國宇陀郡ハ瀧村より文称麿の

墓殿を堀いづること千餘年を經て野人のために堀ぐることいくども、墓誌あれば、こゝこゝぐらふせられざるをば、こゝ貴人の葬埋ならべ〳〵墓誌あるべきといたれおきてあるべ唐土あゝ明の萬曆のもとゞめ、郃陽縣北舊城より曹全碑をあり出ることおのゞ掘りむきあゝ、土中より金石を堀いづること多くといども、かゝ古代の徵こゝあるものいと希なん

銅鐸

今もたまくまに堀いづることある阿育王の寶鐸とつふ銅器あるその事はゝえたゝ、扶桑畧記に天智天皇七年正月十七日於近江國志賀郡建崇福寺始令平地堀出奇異寶鐸一口高五尺五寸、まゝ續日本紀に、和銅六年七月丁卯大和國宇太郡より堀そ、三代實録に、貞觀二年八月辛卯三河國渥美郡村松山中少しも堀獲たゝまゝはゝえたゝ、近くも三河國御油の驛より堀出たゝ鹽尻に載寛政四年三河國谷口村より堀いづること閑田耕筆に記し、文政八年伊勢國壹志郡下川口村の東風呂谷より堀出ること聞ハ予も一口を藏弆せり、されとうなて目擊するものゝ中ゝに寫山樓の藏品ゝも奇絶とす、遵諸家に藏すること少くゝ、その圖說の考證したゝ書もあれど、石山寺緣起の繪に寶鐸を堀出たる圖を載さ



高島千春男
千秋摹

志ハこゝに摹出す、

右の繪ものの上古より堀出るところの銅鐸と形状とを切りふる畫工花真物を見ずしてその名よりて名づけるあ
ゝたらくまる形のこの堀いでゝやあらん、

七福神

七福神ごのふりと狩野家ふくふくと七福神遊戯の圖を
繪しより世ひろくて、今ハ世人のあまねく繪てあそべるとて
ものわれりとぞ、ある時馮山樓もくこのものひ出くく七福神の
圖ハいづれのあるよりゝ見えるまゝとひしゝ狩野松榮ハ
あらるるよりふきものを見ずと先生ハさてこの七神ハ
同異あり摩訶阿羅耶の七福神傳ハ辨才天と吉祥天
ものありて壽老人あく、書言字考ハ吉祥天ハ壽老人も
なくて捏ゝを加へゝ吉祥天在りて壽老人を省しハさもあ
らん、こゝ壽老人と福祿壽ハ同じ老人星ゆれいれり、捏ゝハ
替たるを誤りゝ、捏ゝの諺曲ハ詞ハ、ゝれをまるものあらん

富貴の身となるさんとあるまゝ福神の中へハ多人なるまゝ、
ゝ福の神といふハ大黒天のみをいへ、そのひとりをのも
ハ能狂言ハ福の神も大黒天あり、さて七福といふ數ハ仁王
經の文ふ七難即滅七福即生とあるまゝあるゞゝ、猶考
證ハ名ゝ記ハ芝響雜記ハ以ゝ、

庚申　心猿　西遊記

庚申塚ハ見ざる聞ざる言ざるの三猿を石ゝて刻たるを道
の傍ハ立たゝ、その獼猴ハ名ちハ、と天台大師の三大部の
中止觀の空假中ハ三諦を不見不聽不言ふ比したまふ
をあゝ、それを猿ハ表して傳教大師三の猿ハ刻たまふ

ゝ知、こハ傳教大師の作の猿ハ比あゝ、今の栗田口の
ハ新きものゝゝと遠碧軒隨筆ハ見えゝ、あゝ、山州
名跡志ふ金藏寺ハ俗にお猿堂といふまゝ三猿の像ハ傳
教大師の作ふゝ、たゞめ他所ハ安置すゆゑありて云ゝ
ふ移せりといゝかれバ此金藏寺ゝ三猿ハ傳教大師の作と
見えゝ、又ある人ハ慈惠大師山王七猿の和歌ハ、
三猿をつゝ庚申ハ傳會せゝハあゝぬあやといゝ、

つゞくとき世の中を世りつゝハまゝゝいざるこそまきるゝ
見きゝてハいとでもゝふハざるものをゝきゝハ中ゝまゞる
つれもゝゝいとゝでもゝそまゝるれまゝ完ゝき世を夢とゝ

何ごとも見れば、こそげ、むづりや、ぶるるとはあるべか
きげ、こそのぞこもおされ腹もたてきろぞとばまきるあろる
心まハあるまれ、とを切りやともも人れあ〜き线いたぎるぞよ〜
見ず聽ず言ざる三の猿よりも思さるそまあるかりけ毛
この七猿の歌ふよりつくりまくけ〜とのふもとを見うあきそあ
らぐ、とよ未知る一首ハそのあくこ三猿をよくころ切りふよ傳殺大
師の三猿ハ像慈恵大師の七猿ハ詠あどいづれも心猿よ意
を寓〜たるものよハあ〜ぬ、古言ふも心とそころをさろるこい
ろあれ心ふ〜ふ心ゆるすかどもよそて心を野猿の逸噪ゆ
比喩ゆるとうべあり、心地觀經ハ心如猿猴遊五欲樹不

暫住、あり、西遊記の一書も亦心猿をぬねと〜玄奘三藏の
西域ハ行る女を西域記慈恩傳あどよりとづきてつろ〜
話說とそ切りいろ〜ろハ緣をろを切りふに慈恩傳ハ唯於
四禪九定未服安心今頼託慮禪門澄心定水制情
猿之逸躁繫意馬之奔馳といふ文もあり、これ西遊記の
緣起とろろあ〜ぶ〜とろろ〜おあひあろふ五雜組ハ西遊
記曼衍虛誕而其終横變化以猿為心之神以猪為
意之馳其始之放縱上天下地莫能禁制而歸於緊
箍一咒能使心猿馴伏至死靡他之論亦求放心之喻
非浪作ハといろハ至當の論ゆ〜見ル小說を見ろいい

行基菩薩の遺誡

砂石集ニ行基菩薩の遺誡の文を載て云世ニあるべハ
望あるハ似たり俗ニそむけハ狂人なり〳〵あかう世の中とハ
又實ハ格言なりとなるべし又同日の談ニハあるべし風来山
人の放屁論ニ世間のためニ骨ををれハ世上で山師とそ〳〵
まども鼠とる猫ハ爪をかくし我より外ハ〳〵人物くさき
面をやつぐかつ〳〵山師ハいそもあり人ハ藝をもつて山の足
代り〳〵我ハ山ハ似たるをもて藝ハ助とハいへるもまさ慷
慨の意ハきあるもあるべしやや〳〵既太史公も天道ハ是耶非
耶とひたれハ古より心あるん者ハ何〳〵ハよろこ〳〵詞ハいざしらず
世のありさまをハいかゝ古歌ハ
まりそとあ命待あのあとばかり憂と考〳〵世ハ考〳〵
天保十一年三月、山崎美成三養居ハ南軒ニ〳〵

三養雜記巻四大尾

北行先生著述目録

涉史臆断 十巻　六史三鏡ヲハジメ野史家衆マヂノ事實ヲ商確シ廿二史劄記唐史論断ニ比ベキ、史學必讀ノ書ナリ、

讀四刑書管見 六巻　唐ノ世ニ律令格式ヲ四刑書ト云ヒヨリテハソノ四書ノ中古今未ダ解シガタキ事ノ發明アリシ事ドモヲ記ス

文教温故 二巻　軍防知新 二巻
先生常ニイフ、文事ハ古ヲ尚ビ、武技ハ新ニ從フベシトテ、温故知新ノ字ヲワケテ名ヅケラレタリ、古今ニ通ジ文武ヲ兼タル學カコノ二書ニテ知ベシ、

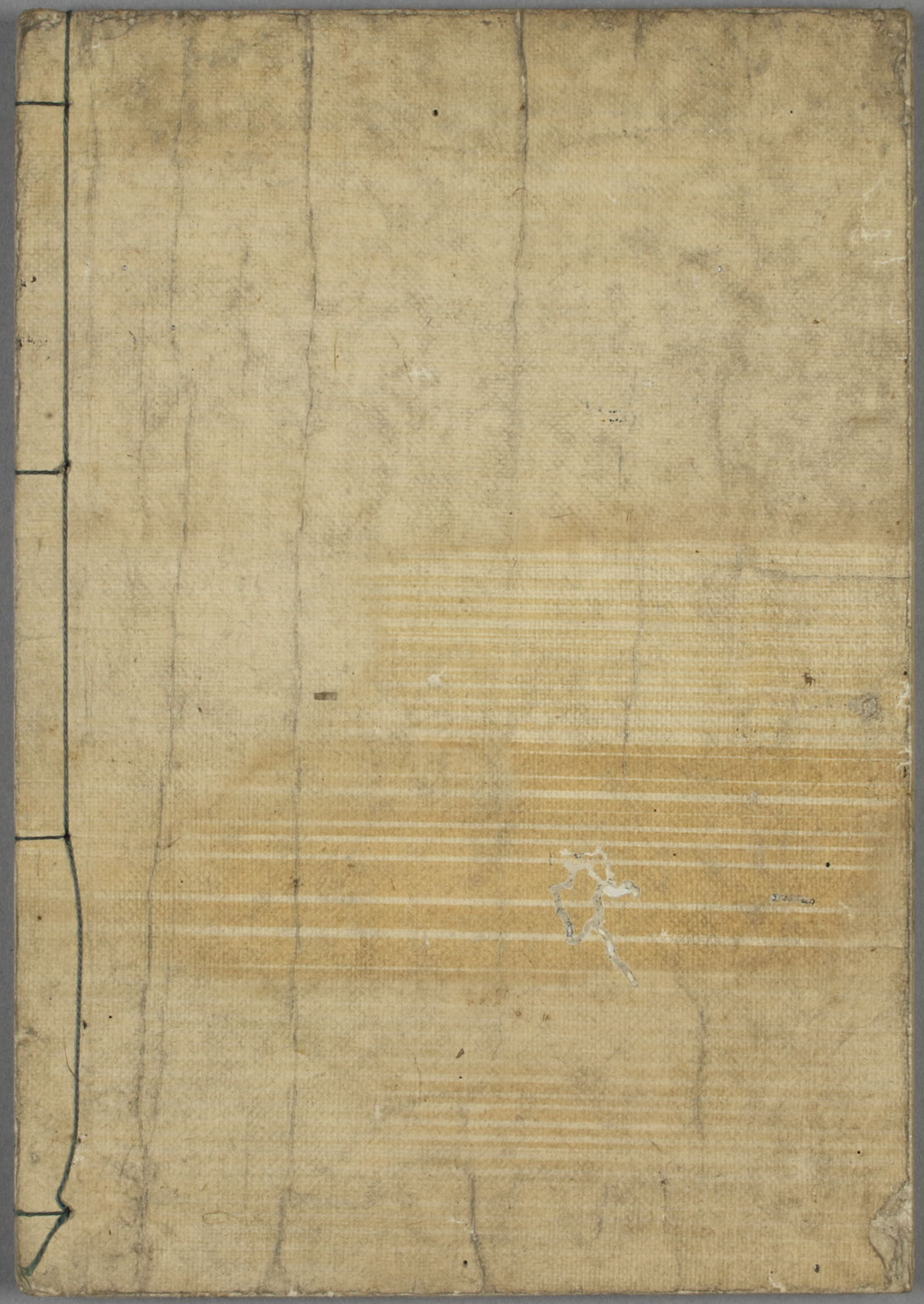
歳時要畧 四巻　好問質疑 四巻

莚響雑記 六巻　撩天閑話 二巻

耽奇漫録 二十巻　駝薈 三巻

猜彙 二巻　提醒紀談 二巻

海録　隨掃篇

書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同　南傳馬町壹丁目　山城屋政吉
同　下谷御成道　英文藏
同　大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　和泉屋吉兵衛
大阪心齋橋筋本町角　河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋博勞町角　河内屋茂兵衛版